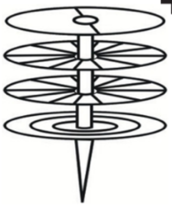
三角形の秘密
(バミューダ・トライアングル)

- バミューダ・トライアングル
- クロップ・サークルとは何か?
- 空飛ぶ円盤とは何か?
- 宇宙人とは誰か?
- 地震
- 津波
- 食べ物を摂らない人物

三宗教における唯一の預言者、 スリーソウル理論の創始者、
霊的王国の皇帝、百篇以上の霊的著作の著者、
世間を驚かせる著者、インドゥ教義の寛大なる源泉

スリ・スリ・スリ・アーチャリヤ・プラボーダーナンダ・ヨギーシュワルル

www.thraithashakam.org



三角形の秘密
(バミューダ・トライアングル)

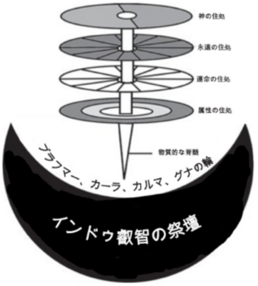
(スリーソウル理論の神秘 — スリーソウルのバミューダ)

三宗教における唯一の預言者、
スリーソウル理論の創始者、
霊的王国の皇帝、
百篇以上の霊的著作の著者、
世間を驚かせる著者、
インドゥ教義の寛大なる源泉

スリ・スリ・スリ・アーチャリヤ・プラボーダーナンダ・ヨギーシュワルル

翻訳者

鈴木正樹



発行:

インドゥ・グニャーナ・ヴェーディカ

(1978年設立 – 登録番号 168/2004

用語集 4

説明 8

序文 9

（トライタカラ・ラハスヤム　–　トライタカラ・バミューダ） 15

インドゥ・ネーション 22

インドゥ・マハー・サムドラム 25

グニャーナ・サムドラム 29

スリランカ 31

ラーヴァナ・ブラフマ 37

海の力 43

三角形の力 – バミューダ・トライアングル 46

ミステリー・サークルの形には意味があるのか？ 96

空飛ぶ円盤とは何か？ 100

エイリアンは存在するのか？ 103

なぜ地震や津波は起こるのか？ 107

無神論者は霊的信仰者に変わることができるのか？ 121

70年も何も食べずに…! 123

用語集

1. **アダルマム**：神聖な戒律に含まれない原理や規範。

2. **アドヴァイタム**：アーディ・シャンカラチャーリヤによって提唱された理論で、唯一なるパラマートマ（絶対魂）について述べるもの。

3. **アーディヤートミカム**：アートマ（不滅の魂）の学び、あるいは自己の認識。

4. **アグニャーニ**：無知な者。スーリヤ（太陽）王朝に属する人。

5. **アクシャルドゥ**：すべての生物の体内に存在する不滅の魂。『バガヴァッド・ギーター』プルショッタマ・プラプティ・ヨーガ第16・17節で、カルドゥ、アクシャルドゥ、プルショッタムドゥについて説明されている。

6. **アスルル**：悪魔。神の働きや奉仕に反対する者たち。

7. **アートマ**：不滅の魂と呼ばれ、生き物の身体に生命力を与える存在。チャイタンニャ・シャクティ（生命エネルギー）の源であり、体内の7つの主要な腺を制御する。死の際にはジーヴァートマ（死すべき魂）とともに体を離れ、カルマに応じた喜びや悲しみを経験する。

8. **アートマ・シャクティ**：不滅の魂を認識し一体化することで得られる魂の活力。

9. **バガヴァントゥドゥ／バガワーン**：女性の膣（バガム）から命を持って生まれた神の人間形態。他の生物は子宮から生まれない。

10. **ビージャクシャラム**：各文字に特定の意味を持たせる種字。

11. **ブータム**：天界の存在。ジーヴドゥ（個魂）もブータムの一種。

12. **ブッディ**：知性。性質に応じて物事を考える機能。

13. **デヴァタ**：半神。より多くの善行を積んだ人間。

14. **デヴドゥ**：探し求められる存在。全能で遍在する者。

15. **ダルマム**：神聖な原則や戒律。

16. **ドゥヴァイタム**：マドヴァチャーリヤによって提唱された二元論。パラマートマとジーヴァートマの両方の存在を認める。

17. **グニャーナム**：超越的知識、最高の知識、神に関する知識。

18. **グニャーニ**：神秘家、秘教的な知者。神聖な知識を得た者。

19. **ゴーラム**：地球、球体。

20. **グラハム**：人間の身体内にある微細な存在。

21. **インドリヤムル**：感覚器官。

22. **インドゥ**：神聖な知識のしるし。

23. **ジーヴァートマ／ジーヴドゥ**：死すべき魂。カルマによって運命を経験する。

24. **クシャルドゥ**：死すべき魂。すべての生物に存在し、『バガヴァッド・ギーター』プルショッタマ・プラプティ・ヨーガ第16・17節でアクシャルドゥとともに説明されている。

25. **マハ・ブータル**：身体の外に存在し、絶対魂によって支配される根源的な元素。

26. **マナス**：心。物事を思い出す働きをする。

27. **モークシャム**：生と死の輪廻からの解脱、救い。

28. **ナクシャトラム**：傘の下にない、目に見えない場所。解脱のしるし。

29. **パンチャ・ブータムル**：五大元素。変化せず、カルマに縛られない自然の構成要素。

30. **パラマートマ**：絶対的な魂。不滅の魂、神、全能、遍在とは異なる。

31. **パラマートマ・グニャーナム**：神聖な知識。

32. **プラパンチャ・グニャーナム**：物質的な知識。

33. **プルショッタムドゥ**：パラマートマ、絶対魂、全能、遍在、宇宙的存在。『バガヴァッド・ギーター』プルショッタマ・プラプティ・ヨーガ第17節で説明される。

34. **スラ**：酒、ウィスキー、飲料。

35. **スルル**：半神。

36. **ウパ・ブータムル**：副次的な天界の存在。

37. **ウパ・グラハムル**：惑星的存在。

38. **ヴィグニャーナム**：物質科学。

39. **ヴィシシュタドヴァイタム**：ラーマーヌジャチャーリヤによって提唱された理論で、アドヴァイタムの理論を補強する形で述べられる。

40. **ヨーガム**：融合、解脱、不滅の魂との合一。

41. **ユーガム**：時代、紀元。

説明

◆ **ムドゥ・コーナムル**：数学で説明される三つの角度。

◆ **トライタム**：アーチャーリヤ・プラボーダーナンダ・ヨギーシュワルによって提唱されたトライタ理論。『バガヴァッド・ギーター』プルショッタマ・プラプティ・ヨーガ第16・17節においてバガワーンが述べた三つの魂を基にしている。

◆ **ブラフマ**：ブラフマとはパラマートマ（神、絶対魂）を意味し、それ以上の存在はない最上位の存在を指す。これはプラーナ文献に登場する四つの頭を持つブラフマーとは異なる。

◆ **ブラフマ・ヴィッディヤー・シャーストラム**：宇宙創造の時にバガワーン・シュリ・クリシュナによって宣言された神聖な科学。ヴィヤーサ・マハルシによって記述された際に『バガヴァッド・ギーター』として現れた。6つの科学は以下のとおり。：

1). 数学（ガニタ・シャーストラム）
2). 天文学（カゴーラ・シャーストラム）
3). 化学（ラサーヤナ・シャーストラム）
4). 物理学（バウティカ・シャーストラム）
5). 占星術（ジョーティシャ・シャーストラム）
6). 神聖科学（ブラフマ・ヴィッディヤー・シャーストラム）

◆ **ハスティナプラム**：現在のデリーと呼ばれるインドの首都。

◆ **アヨーディヤー**：かつてラーマ王国の首都であった都市。

◆ **ユガムル**：インドの時代区分には四つのユガ（時代）がある。それらは 1). クルタ・ユガム 2). トレータ・ユガム 3). ドワーパラ・ユガム 4). カリ・ユガム

（再び）である。それぞれのユガには固有の時間的スパンがある。

◆ **インドゥ・マハー・サムドラム**：現在「インド洋」と呼ばれている海は、かつて「インドゥ・マハー・サムドラム」と呼ばれていた。

◆ **インドゥ・デーシャム**：「インドゥ」は知識のしるし、「デーシャム」は国を意味する。ゆえに「インドゥ・デーシャム」は「知識の国」を意味する。現在のヒンドゥー国家（ヒンドゥー・デーシャム）は、元々「インドゥ国家」または「インドゥ・デーシャム」と呼ばれていた。

◆ **カラグニャーナム**：未来の出来事を予言したとされるシュリ・ポートゥルリ・ヴィーラ・ブラフメーンドラ・スワーミが宣言した未来予知の教え。多くの人々に信じられている。

バミューダ・トライアングルの秘密

（トライタカラ・ラハスヤム – トライタカラ・バミューダ）

序文

「三角の秘密」と題されたこの小さな書物は、主に「バミューダ・トライアングル」と呼ばれる海上の場所について書かれています。バミューダ諸島は海に近接しており、誰もが「バミューダ・トライアングル」と呼んでいますが、一

部の人々はそこに大きな悪魔が存在すると考え、「悪魔の三角地帯」とも呼んでいます。およそ20年前、ある新聞に特集記事が掲載され、1947年に大西洋上でアメリカの戦闘機6機の手がかりが見つからず、それ以降もその所在が判明していないこと、またそれ以前にもアメリカ近海の三角形状の海域で多くの失踪があったと報じられました。その出来事は奇妙に感じられ、さらに後になって、調査に向かった船舶や航空機までもが消息を絶ち、発見されなかったことが報告されました。そのとき私は、海に出た船が消えるのはある程度理解できても、空を飛ぶ飛行機まで消えることには説明がつかないと思いました。飛行機までもが消えると観察された瞬間、その場所では人類が理解できない何か神秘的な力が作用していると結論づけられたのです。

英語の「トライアングル（三角形）」という言葉が私の注意を引きました。テルグ語では「ムドゥ・コーナムル（三つの角度）」と呼ばれます。というのも、宇宙全体とそこに宿る神の叡智は、この「三」という数に基づいているからです。この時点で、「三とは何か？」と誰もが疑問を持つでしょう。これは、我々が提唱しているスピリチュアルな知識体系「トライタ理論」に基づいています。過去にはアーディ・シャンカラチャリヤがアドヴァイタ（不二一元論）

を提唱し、ラーマーヌジャチャリヤがヴィシシュタドヴァイタ（限定的非二元論）を、マドヴァチャリヤがドヴァイタ（二元論）を説きましたが、今こそ我々が、根拠に乏しいそれらを退け、「トライタム（三重性）」を明かす番です。これら従来の理論は精神的教育において正しい道を示せておらず、基盤のない建物のように、いつ崩壊してもおかしくないものです。トライタムは、『バガヴァッド・ギーター』プルショッタマ・プラプティ・ヨーガ第16・17節にて、神自身によって明かされたものです。バミューダの三角は、このトライタムの概念と非常に近く、三角形の仕組みを理解できない者がいたなら、それはトライタムとつながっていると私は考えました。『バガヴァッド・ギーター』を通じて語られたトライタムが理解されていないように、研究者たちが説明した三角形もまた理解されていなかったのです。三角形の秘密は海の中で禁断の領域として残されており、トライタムによってのみ明かされうると理解されました。

三角形に関心を持つ者がいるなら、それを理解するにはまずトライタムについてある程度知っている必要があります。これまで謎とされてきたバミューダ・トライアングルの秘密は、トライタ理論に基づいて集中して探求したときに、私たちに理解されました。それに従い、あらゆ

る側面が理解され、他の人々のためにも論文として記すことにしました。その成果こそが、『バミューダ・トライアングルの秘密』と呼ばれるこの論考です。この書に記されたすべての情報は、「ブラフマ・ヴィッディヤ・シャーストラム」と呼ばれる六大科学の中で最も高度かつ包括的な科学、すなわちスピリチュアルな教育理論に基づいて探求されたものであり、虚偽や科学的根拠のないものではありません。この論考はバミューダ・トライアングルの全貌を明らかにし、読者に「アートマ（不滅の魂）」についての興味と、精神的な人間へと変容する機会を提供します。

この論考に対して、一部の読者から「アメリカの科学者たちですら解明できなかったことを、どうして一個人が説明できるのか」「ここに座って書かれた言葉が、どうして真実だといえるのか」といった疑問を抱くのは当然のことです。そうした疑問を持つことは間違いではありません。しかしながら、この論考で述べられたことを盲目的に否定するのではなく、よく考え、自分自身でそれが真実か偽りかを判断してほしいのです。この論考は単に三角形の話だけでなく、地震、津波、マグマ（火山岩）などのさまざまな災害にも関わる事象を関連づけて語っています。三角海域で船や飛行機が消失した背後には雲の影響があるとされ、その雲の力は計り

知れないものです。1940年には、ある小型飛行機が三角地帯で雲に飲み込まれ、再び解放されたことで、外部の者に「雲が関与していた」ことを示唆しました。そのパイロット自身が語ったところによれば、その小型機はヘリコプターのような形をしており、時速104キロで飛行していたにもかかわらず、雲から解放された直後にたった3分間で180キロ離れた地点に達しました。これは時速3600キロに相当し、その機体では実現不可能な速度であり、ナビゲーションも失敗し、エンジンも停止、燃料もまったく消費されていなかったのです。この説明を分析したところ、雲は単にその正体と力を示すだけでなく、捕らえたものをわずか数秒でどんな距離にも運ぶことができる力を持つことを証明しようとしていたのだと推測されました。このように、三角地帯の力が誰にも理解されておらず、物理的証拠も残されていない中で、この論考では精妙なスピリチュアル知識と不滅の魂（アートマ）に関する知識をもとに、いくつかの詳細が説明されています。本書には多くの秘密が明かされており、未来の世代にとって「不滅の魂（アートマ）」について学ぶ貴重な機会となるでしょう。この序文は、本書をあなたに紹介し、精神的な世界へと進む第一歩を後押しすることを目的として記されています。

著

アーチャーリヤ・プラボーダーナンダ・ヨギーシュワルル

バミューダ・トライアングルの秘密

（トライタカラ・ラハスヤム　—　トライタカラ・バミューダ）

「インドゥ」という言葉の意味は、月、王、そして知識のしるしです。ゆえに、パールヴァティーの伴侶であるシヴァ神は、頭に三日月を冠し、知識を頭に持つこと、すなわち知恵ある存在であることを象徴しています。このように、一般的にもスピリチュアルな文脈においても、「インドゥ」という語は知識を意味します。『バガヴァッド・ギーター』の「アクシャラ・パラブラフマ・ヨーガ」第25節において、クリシュナは「チャーンドラマサム・ジョーティ（月光）」と語り、これは神聖な知識を示唆しています。知識は地上で二つの形で現れます。一つは神聖な知識、もう一つは物質的な知識であり、両者において「科学」というものが存在します。知識は知性によって理解され、科学は感覚器官を通しても認識されます。つまり、科学は目で見たり耳で聞いたりすることができ、知性

を通して吸収されます。たとえば、ある料理の作り方を誰かから学んだとき、それが「知識」です。その知識を知性が理解し、指示通りに調理を実行したとき、それが「科学」です。このように、知識を実践することで科学となり、誰でも経験することが可能になります。料理人が得た知識で作られた料理は、百人の人々が食べてその成果を味わうことができます。たとえその百人が料理の知識を持っていなくとも、料理人一人の知識によって、多くの人が恩恵を受けられるのです。たとえば、携帯電話のように目に見えるものでも、最初は一人の発明者によって開発されました。その知識をもとに、さまざまな企業が製造を始め、今では何百万人もの人々が使用し、楽しんでいます。しかし、携帯電話を使っている人々全員が、その知識を持っているわけではありません。最初の発明者が外部に明かすことで、それが知識として成立し、それをもとに製品が作られて初めて「科学」と呼ばれるのです。現在では、少数の人々の知識によって国全体が科学的に発展しました。事実として、多くの人々が科学の恩恵を享受しています。

以上を観察するに、知識と科学は異なるものであることが明白です。現代で「Science（科学）」と呼ばれる英語の言葉は、古代では「ヴィグニャーナム」と呼ばれていました。科学の基礎

となる知識は、英語では「スーパー・サイエンス」または「スーパー・ナレッジ」とも呼べるものです。先に述べたように、知識には2種類あり、物質的知識は「スーパー・ナレッジ」、神聖な知識は「スーパー・サイエンス」と呼び分けることができます。一部の人々が神聖な知識を「スーパー・サイエンス」と呼んでいたため、ここでもそれに従います。詳細に入る前に、一つの事例について述べましょう。「カルルル」という場所ではダイヤモンド（ヴァジュラ）が見つかり、そのためその地域は「ヴァジュラカルルル」と呼ばれています。これまでに多数の人々が多種多様なサイズのダイヤモンドを手にしており、価格も1,000ルピーから1クロール・ルピーに及ぶまで幅があります。これらのダイヤは一度に見つかったのではなく、数百年をかけて徐々に発見されてきたものです。将来的にもダイヤは見つかり続けるでしょう。このように長年にわたってさまざまな大きさのダイヤモンドが見つかっている事実から、その地域にそれらが元々存在していたことは、誰もが認めざるを得ません。世界的に有名な「コヒノール」ダイヤモンドも、クルヌール県のナッラマラ森林地帯で発見されました。このダイヤは、ムスリムの「コヒノール」氏によって発見されたことから、彼の名前を取って命名されました。

このように地上にさまざまな種類のダイヤモン

ドが存在していたように、科学機器や機械に関連する知識も、古代から地上に存在していたのです。ある特定の知識は、それを最初に探求した人によって発見され、他の誰もがその恩恵を受けられる点で、ダイヤモンドと同様です。ここで注目すべき点は、ダイヤモンドを発見して手に取った人は、それを「自分が見つけた」と言うのに対し、科学者が新しい方法や理論を見出し、それが有効だった場合、「自分が成し遂げた」「自分が発明した」と語る点です。科学者は、自分が知る手順に従ってその成果を示し、証明するのです。たとえば、1866年にマルコーニがラジオを発明する以前には、それは存在しませんでした。ダイヤモンドであれ、機器や理論であれ、それが今発見されたということは、以前から地上に存在していたことを意味します。つまり、今我々が知っているものは、すでに地球上に存在していたものであって、過去に存在しなかったものは発見されえません。今までに発明されたコンピューター、飛行機、宇宙ステーション、原爆、携帯電話、テレビなどもすべて、もともと存在していた知識をもとに作られたのです。人類が快適に生きるために使っているこれらの道具に関する知識は、宇宙創造の時点で神によって創られたものであり、その知識は今なお見つかっていません。無神論者はこうした言葉を受け入れようとはしないでしょうが、それには科学的な根拠がありません。一

方で、これらの知識が最初から存在していたこと、そしてそれを創造した存在がいることには、科学的根拠があります。以下の点も重要です。ある物質が科学的に存在すると証明された場合、それが存在しないと主張するなら、それもまた科学的に証明されなければなりません。知らないからといって「存在しない」と決めつけるのは、科学的とは言えないのです。

ここまでに述べたように、「スーパー・ナレッジ」は科学の基礎です。知識も科学も、それと無関係には存在し得ません。物質的知識は五つの科学（五感）を基礎とし、神聖な知識は「ブラフマ・ヴィッディヤ・シャーストラム（超科学）」という一つの科学のみに基づいており、これは他の五つの世俗科学よりも崇高で神聖です。これまでに知られてきた物質的知識は、初等教育から大学教育まで教師によって教えられており、それは「科学」という形で認識されています。したがって、物質的知識に基づく科学は、すでに多くの人々の経験の中に存在しています。しかし神聖な知識は、説教師の口から聞いても、物質的知識のように誰もが目で見て理解できるわけではありません。たとえばコンピュータを製造した人以外でも、製品として完成したものを使ってその恩恵を享受することができます。これに対し、神聖な知識は、それを理解し、それに従って行動する者だけが、その恩

恵——すなわち至福（アーナンダ）——を得ることができます。また、物質的知識から生まれた科学は、たとえ一人が発見したとしても、誰もが利用して利益を得ることができます。しかし、神聖な知識から生まれた科学は、それを発見した本人のみが体験しうるのです。神に関する神聖な知識は、神自身によってあらかじめ啓示されており、対して物質的知識は人間によって後から発見されたものです。神聖な知識は「与えられた」ものであり、物質的知識は「発明された」ものです。この点こそが、神聖な知識と物質的知識の根本的な違いです。神聖な知識の興味深い点は、それが正確に理解されず、核心が把握されていない限り、それに基づく科学を知ることができないということです。神が明かした本質に従って神聖な知識が理解されたときのみ、そこから生まれる科学を実体験することが可能になります。神聖な知識に基づく科学には、神の存在を証明するような前兆があらかじめ含まれている方法が存在しています。一方で、物質的知識は神聖な知識とはまったく無関係です。物質的知識において提唱された理論のいずれも、神聖な科学を説明することはできません。

すべての人々に認識され、経験されるような事象であっても、それが物質的知識によるものではない場合、それは必ず神聖な知識に由来する

と解釈されるべきです。そしてそれは、神聖な知識に基づく科学によって明らかにされるのです。また、神聖な知識を通じて生まれた科学は、すでに明かされた神聖な知識によって理解されます。それに対し、物質的知識は最初から存在していたわけではなく、それが表面化したときに初めて科学的な形となりました。物質的知識は目に見え、誰にでも理解されやすいものです。これに対応して、物質的な科学も視覚的で、万人に理解可能です。一方で、神や神聖な知識、そしてそれに由来する科学は、どれも目に見えるものではありません。神聖な知識から生まれた科学は、それを知っている人にしか理解されず、隣にいる人でさえ知ることはできません。そのため、神聖な科学は物質的科学のように広く普及することはありません。この問題は、我々の国に限らず、海外の人々にも共通のものです。しかし今日では、どの国の人々も神聖な知識への関心や勤勉さを失っています。現在、すべての国において機械の使用が増え、物質的知識の利用も増加しています。そして、神聖な知識への好奇心はまったくと言っていいほど存在しません。人類は危険な兵器を製造することで無知とエゴを育て上げ、自分たちこそが最高の存在だと考え、神とは単なる想像上の存在であり、知識の浅い人々が抱く幻想にすぎないと思い込んでいます。すべての国において約80％の人々が「神は存在する」と信じていますが

、そのうちの95％は神聖な知識を知りません。中には、神が存在しないと言ったことで災いが降りかかることを恐れて「神はいる」と言う人さえいます。

インドゥ・ネーション
（インド国家）

かつてのインド国家（インドゥ・ネーション）には、現代と比べて神聖な知識（ディヴァイン・ナレッジ）を持つ人々が非常に多く存在していました。文明が発展するにつれて人類は世俗の教育を重視するようになり、神聖な知識への感謝の念は大きく減少し、それに反比例して物質的知識への信頼が高まりました。現代の我が国では「まず教育、その後に就職、そして収入を得ること」が人生の基本的な流れとなっており、それ以外の事柄にはほとんど関心が向けられていません。わずかに信仰心を持つ人々もいますが、その多くは神（バガワーン）ではなく半神（デーヴァ）への信仰であり、その信仰も無私ではなく利己的なものです。信仰という名目が政治的な利益追求のために利用され、「自分たちこそが真の信仰者だ」と主張する宗教

的保護団体が多数誕生しました。こうして、かつてインド国家に存在した神聖な知識の水準は、著しく後退してしまいました。クリタ・ユガム（最初の神話的時代）ではなく、トレータ・ユガム（ラーマの時代）においてさえも、当時のインド国家はスピリチュアルな教育と神聖な知識において世界のどの国よりも優れており、神聖な知識と力において非常に高い評価を得ていたのです。

現在では別の国となっているアフガニスタン、パキスタン、バングラデシュ、さらにはスリランカも、かつてはインド国家およびこの母なる大地の不可分の一部でした。トレータ・ユガムの時代には、ランカとインドは一体であり、現在それらを隔てている海は当時存在していませんでした。サイクロンの影響で一部に浅い池や水たまりができ、水が一時的に停滞する地域もありましたが、多くの場所では水は数百メートル未満の幅で東から西へ流れており、地続きの場所も数多く存在していたのです。ランカとインドは同じ大地に属していながらも、ランカは独立王国として別の王により統治されていました。同様に、北方ではパキスタン、アフガニスタン、バングラデシュもそれぞれ異なる王によって支配されていました。現在のデリーは、

トレータ・ユガム時代には「ハスティナプラム」として知られ、北部はある王によって、南部はアヨーディヤーを首都とした王国により、しばらくはダシャラタ王、その後はラーマ王やその王統の者たちによって統治されていました。クリタ・ユガムの時代、またトレータ・ユガムの一部期間には、ランカもインドの王によって支配されていたことがありましたが、ラーマの時代およびその前後においては、インド国家とは無関係の独立した王国として存在していました。

　インド国家はアジア大陸の一部ではありますが、北にはヒマラヤ山脈という巨大な壁のような自然の障壁が存在し、他のアジア諸国と地理的に分断されていること、さらに周囲を海に囲まれていることから、特別な「大陸」として「バーラタ大陸」と呼ばれてきました。インド国家はアジア大陸の一部でありながら、ヒマラヤを頂点に、スリランカを基盤とするその形状は、目には見えない霊的力を備えた特別な地域として捉えられてきました。アジア大陸は世界最大の大陸であり、その中でもインドは物理的には独立したように見えるとともに、見えない次元ではスピリチュアルな力において卓越しており、精神教育と神聖な力の発祥の地として存在

し続けています。神はこのインドに5回降臨し、自らの原理を明かした後に去りました。そして6度目の誕生もまたこの地で果たされました。その6度目の降臨において、神はすべての神聖な原理を説き明かしたため、インド国家には比類なき霊的特性が与えられたのです。今日、世界には194の国がありますが、この宇宙に遍在する神が「人間の姿（バガワーン）」として誕生された6回すべてがインドであるということには、明確な理由があるのです。

インドゥ・マハー・サムドラム

（インド洋）

　創造主である絶対魂（パラマートマ）は、この全宇宙をただ一人で創造しました。この存在は「神」と呼ばれ、最も強大で、形を持たず、神聖な戒律（ダルマ）によって律せられています。神の種類やその本質については誰も知りません。その神が人間の姿として降臨することのしるしとして、不滅の魂（アートマ）の力——すなわち神聖な力——が地上に現れるのです。地球全体の表面のうち約73％は水、残りの27％が陸地です。ランカ（現在のスリランカ）はインドの南部に位置し、水に囲まれています。そ

してインドもまた三方を海に囲まれています。インドとランカの間にある水域は、ランカをインド大陸内の小さな特別な島国のように見せています。この海域の存在により、インドの地形はアジア大陸の中でも独特な外観を持ち、ランカもまたその一部として見なされています。

　海は地球上に連続して広がっており、大陸のように分断されることはありません。しかし、地球がいくつかの大陸に分かれてそれぞれに名称が与えられたのに対し、海もまたその位置に応じて名称がつけられました。インド大陸の南部およびランカの四方を囲む海は「インドゥ・マハー・サムドラム（インド洋）」と名付けられました。クリタ・ユガムの時代には、インド国家の南側に広がる地域がすでに水域70％、陸地30％の構成となっており、「インド洋」と呼ばれていました。このインド洋がインド国家（バーラタ）の南に存在していたことから、この国は「インドゥ国家（インド国家）」と呼ばれるようになったのです。その後の時代になると、「インドゥ国家」は「ヒンドゥー国家」と呼び変えられてしまいました。神は、「時の流れとともに、戒律（ダルマ）は無戒律（アダルマ）へと変化する」と語りましたが、それと同様に、意味ある名前だった「インドゥ国家」は切

り離され、無意味な「ヒンドゥー国家」という名が付けられるようになったのです。「ヒンドゥー国家」が北の「シンドゥー川」に由来する名前だと主張されることもありますが、それは考えるべき重要な問題です。我々の偉大な国が、重要性に欠ける川の名前にちなんで「ヒンドゥー国家」とされたのは明らかに誤りです。本来なら、シンドゥー川にちなんで名付けるのであれば「シンドゥー国家」と呼ばれるべきだったはずです。たとえ何世紀にもわたって誰かが誤って「ヒンドゥー国家」と呼び続けたとしても、シンドゥー川が由来であるならば正しく「シンドゥー国家」と訂正されるべきでした。シンドゥー川に由来する名称だという主張が多少の道理を持つとしても、それほど重要でない川よりは、国を縦断し、聖なる川として知られる「ガンジス川」にちなんで「ガンガー国家」と呼ぶ方が理にかなっているはずです。

あるいは、インド最大の川である「ブラフマプトラ川」にちなんで「ブラフマプトラ国家」とする方が、さらにふさわしいとも言えるでしょう。実際、シンドゥー川はパキスタンを流れており、その周辺地域が「シンドゥー州（シンドゥー・ラシュトラム）」と呼ばれるのであれば、それは妥当です。しかし、インド人がわざわざ他国に流れる川の名前を自国名に使うのはまったく意味をなしません。ヒンドゥー教を守る

と主張する人々に対して、私たちはこう問うべきです——「あなたたちはバーラタ国家（インド）の古代の歴史を知っていますか？」「神聖な力と教育においてインドが世界で最初であったことをご存じですか？」「バガワーンとして神がバーラタ国家にのみ降臨し、明かした戒律を一つでも知っていますか？」「『インドゥ』という言葉の意味をご存じですか？」—— 神聖な知識を知らない者は、自らを「インドゥ」と名乗るべきではありません。神聖な知識と何の関係もない者はインドゥではなく、今日ではそうした人々が「ヒンドゥー」と別の名前で呼ばれているのです。

「インドゥ」という言葉は、「神聖な知識」の別名です。インド国家は、世界の国々の中でも神聖な知識においてトップの位置にあります。したがって、バーラタ国家は「インドゥ国家」と呼ばれ、その意味は「神の国（知識ある者たちの国）」です。バーラタ国家が「インドゥ国家」と呼ばれた最大の理由は、神聖な知識を持つ人々が多く存在していたからに他なりません。振り返ってみれば、シンドゥー文明に属する無知な人々が「ヒンドゥー」と呼ばれたというのなら、シンドゥー川沿いに暮らすパキスタンの人々も「ヒンドゥー」と呼ばれるべきでし

ょう。しかし実際にはそうなっていません。したがって、「ヒンドゥー」という歴史も意味もない言葉は捨て去り、歴史的にも意味を持つ「インドゥ」という言葉によって、バーラタ国家は「インドゥ国家」と呼ばれるべきなのです。

グニャーナ・サムドラム

(知識の大海)

インド洋(Indu Maha Samudram)は、バーラタ国家が誇りをもって「インドゥ国家(Indu Nation)」と呼ばれるようになった主な理由です。この果てしなく無限の宇宙には、姿を持たず知恵そのものである神が、すべての粒子に遍在しています。その力は至る所に存在していますが、特定の地球上の地点に極めて大量に集中している場所があります。これは地球だけに限らず、他の惑星や星々、さまざまな場所にも見られる現象で、地球の表面にも存在しており、その規模は数十万平方キロメートルに及びます。トレータ・ユガムの時代、この神の力はインドの南部、つまりスリランカをほぼ囲む海域に集中していました。神は戒律(ダルマ)を持ち、戒律

は知識から成り立っています。知識が理解されれば戒律も理解され、戒律を理解すれば最終的に神も理解できるということになります。ゆえに古の賢者たちは「神聖な力とは知識の力である」と述べました。この知識の力がスリランカ近辺、バーラタ国家の南側の海に存在していたため、その海は「インド洋（Indu Maha Samudram）」と名づけられたのです。クリタ・ユガムの時代には、神聖な知識を持つ修行者たちがこの海を「知識の大海（Gyana Samudram）」と呼んでいました。「知識（Gnanam）」という言葉は「インドゥ（Indu）」と同義であり、当時の修行者や知識人たちはこの知識の海を「インドゥ・オーシャン（Indu Ocean）」と呼んでいたのです。そして、知識の力が最も偉大なものであることから、「偉大なる（Maha）」という語が加えられ、「インド洋（Indu Maha Samudram）」と呼ばれるようになりました。このインド洋は単なる名称として残っただけでなく、その神聖な力によってバーラタ国家とスリランカを活性化させ、両国にその力を分け与えました。その結果、インド洋を通じて神聖な知識の光がバーラタ国家とスリランカに広がり、以来、両国は地球上のどの国よりも神の力と精神性において先導的な地位を占めるようになっ

たのです。ここで次のような疑問が浮かぶかもしれません—すなわち、南の海に神の力が存在していたからこそその海はインド洋と呼ばれ、それによりバーラタ国家はインドゥ国家と名づけられたのだとすれば、スリランカも神の力を受けていたというのに、そこにはどのような名称やアイデンティティが与えられたのか？—その答えはこの後に示されます。

スリランカ

スリランカは、インド洋に最も近い国として、バーラタ国家（インド）よりも二重の恩恵を受けました。バーラタ国家では数多くの著名な知識人たちが生まれたことから、「神聖な知識の誕生地」としての認識を得ており、知識人の故郷として「インドゥ国家（Indu　Nation）」と呼ばれてきました。実際、スリランカがバーラタ国家よりも大きな恩恵を受けていたという証拠は数多く存在します。スピリチュアルな観点から見れば、「解脱（モークシャ）」は「知識（グニャーナ）」に次いで最も偉大なものであり、知識は神についての情報を明らかにする一方、解脱は神と一体に

なることを意味します。『バガヴァッド・ギーター』第6章「アートマ・サンヤマ・ヨーガ」第46節では、神（バガワーン）は、自らを神と一体化させようとする修行者（ヨーギー）は、神聖な知識を知っているだけの知識人よりも優れていると述べています。

「タパスヴィビョー・アディコー・ヨーギー、グニャーニビャー・ピ・マトー・ディカハ、カルマビャーシュ・チャ・アディコー・ヨーギー、タスマード・ヨーギー・バヴァールジュナ（修行者は苦行者にも、知識人にも、行為者にも勝る。ゆえに、アルジュナよ、ヨーギーになれ！）」。

この教えからわかるように、バーラタ国家は知識によって「インドゥ国家」となりましたが、スリランカは知識を超える「解脱」を得た国であると考えられます。バーラタには多くの知識人が誕生しましたが、スリランカに生まれた者たちは解脱を果たしたのです。占星術の視点では、月は知識の王であり、知識のしるしともされます。三神一体（トリムールティ）の一柱であるシヴァ神は、月の三日月を頭に冠し、自らが知識人であることを示しています。「インドゥ（Indu）」は月（チャンドラ）の別名でもあります。クリタ・ユガムの時代、古の賢者たちはバーラタ国家を「知識の象徴」として「インドゥ」と名付けました

。「インドゥ」という語は知識の象徴、「スリ（Sri）」という語は解脱の象徴とされ、それに従って、インド洋に最も近いスリランカには「スリ」の名が冠され、「スリランカ」となりました。インド洋に二番目に近いバーラタ国家は「インドゥ国家（インド）」と呼ばれ、最も近いスリランカは「スリランカ」となったのです。

世界中を見渡しても、「スリ」という語を国名に冠しているのはスリランカだけであり、また、知識の象徴となる名称を持つのもインド（インドゥ国家）だけです。隣国スリランカはいまだに「スリランカ」という名を保っていますが、バーラタ国家は無知とマーヤー（幻想）の影響により、「インドゥ国家」ではなく「ヒンドゥー国家」と呼ばれるようになってしまいました。ヒンドゥーの原理を守ると称し、「ヴィシュワ・ヒンドゥー」の理念を掲げて宗教を広めようとする人々は、実際には歴史も知らず、ダルマの本質が「インドゥ＝神聖な戒律」であることも知らないまま、幻想である「宗教」にとらわれています。「人々はヒンドゥーではなくインドゥである」と主張されると、「インドゥ」は単なる誤記であり、「ヒンドゥー」に直すべきだとさえ言ってきます。彼らはグンタカルやマハーナンディといった地域でも、こうした主張を他宗教のものだとして退け

てきました。

　　ここで、スリランカについて議論する時が来ました。トレータ・ユガムにおいて、ラーヴァナ・ブラフマはこの地に誕生しました。『ラーマーヤナ』に記された歴史によれば、「インドゥ」という語を「ヒンドゥー」へと変えた人々は、ラーヴァナを侮辱し、最悪の人物として描いていますが、彼は本来、三時（三つの時代＝過去・現在・未来）を知る大智者（トリカーラ・グニャーニ）、修行者、そして偉大なる「ブラフマ」として知られていた人物です。解脱の象徴たるスリランカに、解脱を受け取る資格を持って生まれたラーヴァナを、「無知者（アグニャーニ）」とまで呼んだこの国に対し、誰もが「かつて神聖な『インドゥ国家』と呼ばれていたのは本当にこの国なのか？」という疑問を抱くはずです。今日のバーラタ国家における無知の増大によって、この国は「ヒンドゥー国家」となってしまいました。それでも、かつての賢者たちが名づけたとおり、いまだにバーラタの各地では、誰も知らなかった知識や神秘が明かされ続けており、バーラタが「インドゥ国家（知識の国）」であることは永遠に証明され続けています。世界の国々に対してバーラタ国家こそが真の「インドゥ国家」であると示すために、世界中の誰も解明できなかった『バミューダ

・トライアングルの秘密』という論考が記されたのです。

「スリランカ」という名前に注目すると、「スリ」という言葉が解脱の象徴として名誉をもってランカに付与され、「スリランカ」となったことがわかります。同様に、「インドゥ」という言葉は知識の象徴としてバーラタ国家に与えられ、「インドゥ国家（インド）」となりました。スリランカはインドよりもインド洋に近いため、特別な文字「スリ」が加えられ、さらに「Lam（ラム）」という神秘的・根源的な音（ビーシャクシャラム＝種字）も含まれています。「Lam」は音節の0番目から1番目に位置する文字であり、「ビーシュ（種）」という語が示すように、何かが生まれる起源を意味します。この宇宙には2つの力が存在し、ひとつは「Hreem（フリーム）」という種字で表される物質的な力、もうひとつは「Lam（ラム）」という種字で表される神聖な力です。「Om」や「Sri」という語は絶対魂（パラマートマ）を示しますが、「Om」や「Sri」という種字を国名に含む国は、スリランカ以外には存在しません。インドにさえ、そのような音は国名に含まれていません。したがって、国名・意味・霊的パワーにおいて、スリランカはインドよりもはるかに優れているのです。

「スリランカ」という名前の中では、「スリ」と「ラム」という2つの語に意味がありますが、最後の「カ」は意味を持たない語尾であり、限定的な目的で付け加えられているだけです。たとえば「シャーパム（呪い）」という語では、「シャーパ」は意味を持ちますが、語尾の「ム」には意味はありません。同様に、「スリランカ」という名前においても、意味を持つのは「スリ」と「ラム」の2文字だけなのです。

ラーヴァナ・ブラフマ

トレータ・ユガムの時代、スリランカにおいてラーヴァナ・ブラフマが誕生しました。彼の名に込められた意味から見ても、スリランカはインド国家（バーラタ）よりもあらゆる面で優れていたと言われています。当時、ラーヴァナ・ブラフマは知識人たちによってその国にふさわしい人物として称賛されていました。一部の歴史家が彼について不適切な記述を残していますが、知識人たちの目には、彼は永遠に偉大な存在でした。「ラーヴァナ」は彼の名前であり、「ブラフマ」は称号です。スピリチュアルな意味において「ブラフマ」とは「最も偉大な存在」を意味します。この宇宙において神を除けば、誰も「最も偉大」とは呼ばれません。そのため「ブラフマ」という語は神と同等の意味を含んでいます。にもかかわらず、この「ブラフマ」という最上級の名で呼ばれた人物が、我々の歴史家によって最低の人物のように描かれたのです。

「ラーヴァナ」という語は「ラ（Ra）＋ヴァナ（Vana）」の二語に分けて解釈できます。著作『マナ・パンドゥガル（祭りの意味）』の中では、「ラーマ」という語も「ラ（Ra）＋マ（Ma）」に分

けて説明されており、それぞれの意味も示されています。「ラーマ」という語は神聖で偉大な語とされ、分解された「ヴァナ」は森、つまり木々の集合体を意味します。すでに述べたように、「ラ」は破壊を意味し、「ラム（Ram）」は破壊の種字（ビーシャクシャラム）です。「ラム」から「マ」の音を取り除けば「ラ」が残り、これもまた破壊の意味を持ちます。したがって「ラ」と「ラム」は共に「破壊」を意味し、「ラーヴァナ」という名は「森を破壊する者」を意味します。この森とは、性質（グナ）や属性（質）を木に見立てた幻想（マーヤ）です。彼はその幻想の森を根本から破壊した人物として、「ラーヴァナ・ブラフマ」と呼ばれるようになったのです。彼は偉大なスピリチュアル実践者であり、三つの時代（過去・現在・未来）を知る知者（トリカーラ・グニャーニ）としても知られていました。トレータ・ユガムにおいて、インド洋に神聖な力が宿っていることを唯一知っていた人物であり、彼はその海で頻繁に沐浴していました。そして、インド洋で沐浴すれば神聖な力が頭部に宿ることも知っていたのです。当時、インド洋には強大な力が存在していましたが、現在はその力は失われており、その理由は後述されます。

ラーヴァナ・ブラフマは、スリランカという名に込められた意味どおり、「解脱（モークシャ）」を達成しました。バーラタ国家では、その国名の

意味にふさわしく、多くの知識人が誕生しましたが、ラーヴァナ・ブラフマは、知識人を超えた修行者（ヨーギー）として最終的に解脱に至ったのです。彼の偉業は今日では知られておらず、無知な者たちによって見過ごされています。バーラタが「知識の国（インドゥ国家）」と呼ばれるようになった後も、幻想（マーヤ）の影響によって「意味あるインドゥ人たち」は「意味のないヒンドゥー人」へと変わってしまいました。同様に、最も偉大な人物であったラーヴァナ・ブラフマも、最も取るに足らない人物として扱われてしまったのです。『バガヴァッド・ギーター』において神は、「時とともに戒律（ダルマ）は退廃し、非戒律（アダルマ）へと堕ちる」と明言しています。古の時代、知識を有していたインドゥ人は、やがて知識も叡智も持たないヒンドゥー人に変わってしまったのです。そして神は、戒律が失われるとき、再び地上に降臨してそれを回復させると述べています。この原則に従えば、神はいつでもバガワーンとしてバーラタ国家に降臨し、人々を再びインドゥ人へと導くでしょう。無知の只中で、アーリア人やドラヴィダ人といった地域差による対立を通じて、ラーヴァナ・ブラフマに関して最悪のことが書かれてきましたが、人々は何が正しく何が間違いかを見極めず、彼を「悪」として理解してしまったのです。

一例を挙げれば、古代では「スーラ（sura）」と

いう言葉は、ごく一部の人々にしか知られていませんでしたが、それは半神（デーヴァ）が飲む酒、現代でいうブランデーやウイスキーのことでした。この「スーラ」を飲む者は「スールル（surulu）＝半神」と呼ばれており、多くの人々も「スールル＝神々」と理解しています。ではスーラを飲まない者は「アスールル（asurulu）＝悪魔」と呼ばれるのでしょうか？　ラーヴァナ・ブラフマをアスラ（asura＝悪魔）と呼んだのも、こうした誤解に基づいています。スールルが偉大だとするなら、アスラと呼ばれたラーヴァナ・ブラフマが偉大ではないというのは妥当なのでしょうか？　ある人が酒を飲んでいる者を見て「ロバですらこんな飲み方はしない」と言ったところ、その酒飲みは「あなたは正しい、私は人間だから飲むが、あなたはロバだから飲まないのだ」と答えました。最初の人は、酒を飲む者はロバよりも劣っていると批判したつもりでしたが、酒飲みは逆に、飲まない者はロバだと考えたのです。同じように、ラーヴァナ・ブラフマはアスラ（スーラを飲まない者）とされたがために、悪魔と誤解され、実際には修行者であり三時を知る知者であったにもかかわらず、正しく理解されなかったのです。

ラーヴァナ・ブラフマがシータを森から連れ去ったのは事実です。その一件だけを根拠に、すべての著述家たちは彼を邪悪で無知な人物として描きました。しかし、彼がシータを連れて行ったのは

邪な意図からではありませんでした。約10か月もの間、シータはラーヴァナによって保護され、10人の侍女が世話をし、娘のように大切に扱われていたのです。彼は毎週一度、妻を伴ってシータを訪ね、必要なものが不足していないかを確認し、なぜ彼女をそのように連れてきたのかの理由を説明していました。彼は、自らの死がラーマの手によってランカで訪れることをすでに妻マンドーダリーに伝えており、そのこともシータに話していました。さらに、ラーマの性格についても将来的に理解できるよう助言し、死の時期さえも前もって知らせていたのです。シータはラーヴァナについて悪く思ったことはなく、彼を偉大な知識人・修行者と認識し、悪口を言ったこともありませんでした。

詳細に調べていくと、ラーヴァナ・ブラフマの出生は極めて秘められたものであり、現在まで誰にも知られていない事実であることがわかります。「秘密」という言葉の意味さえ知らない人もいるかもしれませんが、少なくとも一部の人々にとってその出生が知られていないならば、「秘密」という言葉には意味と価値があります。その秘密を詳しく語っても、理解できるのはごく一部の人々だけでしょう。前述のように、スリランカを囲む海には神聖な力が存在しており、それは地上において「神聖な知識」「ヨーガ（統合）」「モークシャ（解脱）」とは何かを人々に示そうとしたの

です。そのため、神聖な力は、「知識」「ヨーガ」「解脱」のすべてを具えた人間としてラーヴァナ・ブラフマの姿を借りて誕生しました。神聖な力は「ラーヴァナ」あるいは「ラーヴァナ・ブラフマ」として具現化され、彼の生を通じて人類に知識とヨーガを示し、最終的には『ブラフマ・ヴィッディヤ（神聖科学）』の法則に従って死を迎え、解脱を達成しました。これは、「どんな人間も、同じ法則に従えば解脱に至ることができる」ということを示すためだったのです。にもかかわらず、こうした偉大な人格を「悪人」や「愚者」として描いた人々は、まったくの無知だったのです。

ラーヴァナ・ブラフマは「十の頭を持つ者（ダシャカントゥドゥ）」と呼ばれました。しかし、「ダシャカントゥドゥ（十の喉を持つ者）」という表現は誤りで、「十の頭を持つ者」は一部意味があるとしても、肉体的には事実ではありません。彼は十人分の偉大な知識を持つ者、すなわち十人の知識人の叡智を合わせ持つ人物だったため、そのように形容されたのです。彼には実際に十の頭があったわけではなく、霊的な意味で十の頭の知識を備えていたのです。頭がなければ喉も存在しないため、「十の喉」という表現は完全に誤りです。彼はたとえ霊的に十の頭を持っていたとしても、喉は肉体的にも霊的にも十は存在していませんでした。

海の力

インド洋に神聖な力が集中していたため、バーラタ国家は「インドゥ国家（知識の国）」と呼ばれるようになり、その下に位置する国は「スリランカ」と名付けられた、という説明がなされてきました。ここで誰もがこう問いかけたくなるかもしれません—「海洋学者や天文学者、あるいは科学者たちはこれまでインド洋に特別な力があるなどとは発見も発表もしていないではないか！」「誰も発見していないのに、どうやってそんなことが言えるのか？ 何か根拠はあるのか？」と。確かに、神聖な力は存在しますが、それは物理的な形を持たないため、物理的に証明することはできません。神聖な力は微細な形で存在し、それは知性によって感じ取ることができ、個人の知的吸収力に依存します。すでに説明したように、かつてインド洋には神聖な力が存在していましたが、現在はその力はそこには存在していません。ここでさらに別の疑問が湧いてくるでしょう。「力がそこに存在していると言っているのに、なぜ今は存在しないと言うのか？」—その答えはこうです。「私は"今はそこにない"とは言いましたが、"どこにもない"とは言っていません」。かつてインド洋にあったその力は、場所を変え、現在は別の場所に

存在しています。その力がどこに移動したかを明確にするために、これからさらに詳しく説明します。

人間の身体全体は自然と関連しており、「空・風・火・水・地」の五大元素（パンチャ・ブータ）によって構成されています。この自然界を構成する五元素に基づいて人の心に宿る力があり、それが自然を支配し動かしています。この身体に内在する力こそが「神聖な力（ディヴァイン・パワー）」、あるいは「不滅の魂の力（アートマ・シャクティ）」と呼ばれます。不滅の魂、またはその力は目には見えず、しかし体全体に遍在し、すべての活動を司っています。この魂が存在していることで体は生きており、魂なくしては肉体は機能せず、生きることはできません。同様に、不滅の魂の力は惑星や地球、星々にも存在しており、それらの天体を動かしているのです。不滅の魂の力が存在しない惑星、すでにその力が離れた天体は、死んだ肉体と同じく、やがて崩壊し消滅します。人間にとっての墓場があるように、天体にとっての“墓場”は「ブラックホール（暗黒の穴）」です。天文学者たちはこれを「ブラックホール」と名付けましたが、それは言い換えれば「黒い洞窟」ともいえるでしょう。

地上の墓穴と、宇宙のブラックホールは本質的に

同じものなのです。人が墓穴に埋葬されて土に還るように、天体はブラックホールに吸い込まれて暗黒に消えていきます。人間の心に宿る不滅の魂の力がその生涯を動かすように、地球の海にもその神聖な力が存在し、それが地球全体にエネルギーを与えています。クリタ・ユガム、トレータ・ユガム、ドワーパラ・ユガムの時代には、この力はインド洋に存在していましたが、カリ・ユガムに入ってからはその場所には存在していません。カリ・ユガムが始まってから3112年が経過していますが、そのうちの最初の2000年間はまだインド洋に力がとどまっていました。そしてそれ以降、つまり今から3112年前、その力は北アメリカ・フロリダ州の近海、約200万〜240万平方キロメートルの範囲に移動して定着したのです。そこから地球全体に向けてその力が放射され続けています。人間の身体のすべての働きが魂の中枢力によって実行されるように、海の中に存在する魂の中枢力によって地球規模の機能も実行されているのです。これが「海の力」に関する秘密であり、これまでどの天文学者も知り得なかった事実です。トレータ・ユガムの時代にラーヴァナはこの海の力について理解していました。そして、この「海の力」についての議論は、ラーヴァナ・ブラフマの時代から、プラボーダーナンダ・ヨギーシュワルルの現代に至るまで、語られてこなかったのです。

三角形の力 ― バミューダ・トライアングル

(トライタカラ・シャクティ ― バミューダ・トライアングル)

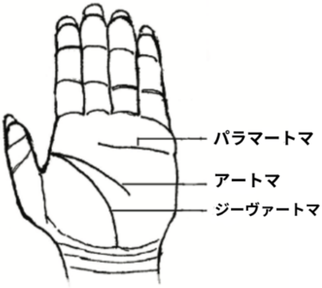
太陽が空のどこかに留まり、光線を地球全体に放って宇宙全体を照らすように、不滅の魂（アートマ）は人間の心に宿り、その力を全身に広げて、身体全体を機能させます。同様に、地球の空間にある海の一点に集中した力が、地球全体に拡がり、自然の一部である五大元素に力を伝えて、それぞれの予定された働きを実行させるのです。不滅の魂の知識によれば、魂は脳幹に存在し、そこから五大元素で構成された身体のすべての部分に力を分配し、その人のカルマ（業）に応じて苦楽を生じさせています。同じように、地球の表面を人間の身体に見立てるならば、不滅の魂の力が身体の五大元素に広がるのと同様に、海に存在する力もまた地球全体に知識を通じて分配されているのです。このことから、スピリチュアリズムには二つの形があります。一つは身体の内側にあるスピリチュアリズム、もう一つは外側の「世俗的スピリチュアリズム」です。これまでにもたびたび、大きな霊と通常の霊という二種類の霊が存在することが語られ、霊とは死すべき魂（ジーヴァ）であると説明されてきました。『悪魔と霊の真実の

記録』という書物では、「大きな霊」とは空・風・火・水・地の五大元素の霊的存在であり、つまりはそれらのジーヴァートマ（死すべき魂）であると説明されています。本書でもすでに述べたように、海の力とは「水の霊の不滅の魂」のようなものなのです。空・風・火・地の霊もまた不滅の魂を持ちますが、今は水の力だけが議論の対象です。

神聖な知識（ブラフマ・ヴィッディヤ）の科学的な根拠として、「ジーヴァ（死すべき魂）」が存在する場所には常に「アートマ（不滅の魂）」も存在します。すべての説明や議論はこの法則に従うべきであり、それに反するものは語られてはなりません。ジーヴァとアートマは「双子の魂（ツイン・ソウル）」であり、この二つがある場所には、それよりも優れた第三の魂「パラマートマ（絶対魂）」が存在します。本書では以前から、第一にジーヴァートマ（死すべき魂）、第二にアートマ（不滅の魂）、そして第三にパラマートマ（絶対魂）という順序で説明されてきました。この三つの魂の構造に基づいて「トライサ・セオリー（Thraitha Theorem）」が生まれたのです。真の神聖な知識とは、まさにこの三魂の構造を理解することにあります。神聖な知識の観点で詳しく見ると、ジーヴァートマは一つの場所にとどまってい

て全身には広がらず、アートマは全身に広がっていて一つの場所にはとどまりません。パラマートマは身体の内外すべての分子に存在しており、ジーヴァとアートマのような関係性を持ちません。ジーヴァートマとアートマは、生と死において共に旅をしますが、パラマートマは決してこの二つと混ざり合うことがありません。パラマートマは常にすべての場所に広がり、どこかからどこかへ移動することもなく、常に「ここにも、そこにも、どこにでも」存在しているのです。この三魂の構造はすべての人間の体内に存在しており、それを示すために、掌には三本の線が作られています。ジーヴァートマとアートマが双子の魂であることを示す二本の線が最初は別々に始まり、最後に交差し、その上に別に引かれた一本の線がパラマートマを表しています。これが、私たちの掌に三つの魂が刻まれている理由です。

不滅の魂は人間の身体に存在するだけでなく、惑星や地球、星々にも存在します。象徴的に言えば、3112年前、インド洋には三つの魂が存在し、それは人間の掌にある三本の線のように、三角形の形で表されていました。



しかし当時、インド洋に三魂の象徴が三角形で存在していることを知る者はいませんでした。その三角形の力は、カリ・ユガの最初の2000年間まではインド洋に存在し、現在は北アメリカの左側にある海の三角形の海域に移っています。この力は約240万平方キロメートルの範囲に広がっており、三角形の形で不滅の魂の力が集中しています。ここまでの話はまるで魔法のように信じ難いかもしれませんが、それを真実として証明する事件が1950年9月16日に起こりました。この三角形の海域で一隻の大型船が消失し、その場所でのみ行方不明になったことが特定されたのです。

その数年前の1947年12月5日にも、同じ場所でアメリカの戦闘機6機が一斉に消失しました。この事実も、海上に力が存在していたことを裏付けるものです。6機の戦闘機が同時に消えたにもかかわらず、その海域に力があることには誰も気づいていませんでした。その後1950年に蒸気船が消失

したことで、人々はその場所に「未知の力」が存在することにようやく気づきました。以降、特定の海域で船や飛行機が次々と消失していきましたが、その原因は誰にもわからず、何が起こっているのかを理解する者はいませんでした。その後、多くの科学者や研究者たちが調査に向かいましたが、彼ら自身が行方不明になる事態となり、誰もその後を追おうとはしなくなりました。以後、その海域は「バミューダ・トライアングル」として一般に知られるようになり、立ち入り禁止区域とされました。その地で何が起きているのか、誰に何が起きたのかは今なお謎のままです。

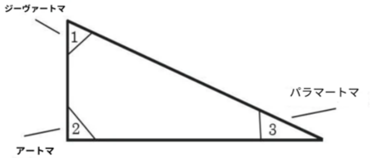
1938年、5500トンの積荷を積んだ船が1〜2分以内に消失しました。船が沈んだのか、爆破されたのか、証拠もなく謎のままでした。調査を行った研究者たちは最終的にこう結論づけました。「あの船に何が起こったかは、海自身しか知らない。神しか知らない。我々には知り得ない」と。ある戦闘機が空中を飛行中にその区域に差しかかると、無線で地上基地に機内の状況を逐一報告していました。しかし、バミューダ・トライアングルに入った瞬間、計器類がすべて狂いだし、速度も高度も方向も示さなくなったのです。パイロットは困惑し、次第に機体は雲に囲まれ、目の前には「洞窟のような空間」が現れ、その中へと入っていき

ました。その時点まではすべて報告されていましたが、その後は通信が断絶し、機体も消息を絶ちました。このような事件は多数発生していますが、結局、飛行機や船がどうなったのかを知る者はいませんでした。バミューダ・トライアングルは科学にも解明できない謎の地帯として残り続けているのです。

古代から三つのユガ（クリタ、トレータ、ドワーパラ）にわたり、インド洋には三角形の形をした神聖な力、すなわち不滅の魂の力が存在していましたが、その力や形状を知る者は誰一人いませんでした。ところが近年、過去60年のうちに、北米近くの大西洋にある三角形の海域に人々が気づき始めました。注目すべきは、かつてインド洋に三角形として存在していたその力が、現在も同じ形で大西洋に存在しているということです。この力は、カリ・ユガに入って2000年経過した後、バーラタ南部から大西洋に移動しました。3112年前までインド洋に存在していたこの三角形の力が、なぜ大西洋に移動したのか。その理由はこうです。

スピリチュアリズムの観点では、不滅の魂は五大元素に内在しており、海の水にも存在しています。不滅の魂は、ジーヴァ（死すべき魂）を持つすべての存在（生きとし生けるもの）と一体になっ

て存在します。さらに、ジーヴァとアートマのほかに、第三の魂であるパラマートマ（絶対魂）も存在します。この三つの魂を外から理解できるように、不滅の魂の力は三角形として水に表現されたのです。ジーヴァとアートマは双子の魂として一体となって存在し、パラマートマは別個に存在します。三角形の構造を見れば、ジーヴァとアートマは対等な角として存在し、パラマートマは特異な角として示されています。神聖な力（不滅の魂の力）は、インド洋でも大西洋でも、同じ形で存在しており、次に示される図で確認することができます。



前頁に示した図のとおり、水上の力は三つの角に広がっています。図において、1番と2番の角はそれぞれ死すべき魂（ジーヴァートマ）と不滅の魂（アートマ）として識別されています。1番のジーヴァートマの角から2番のアートマの角へ向かう線は直角（90度）に上へ伸びています。2番の角から3番の角に向かう線は、横に伸びており、

これは絶対魂（パラマートマ）を示すものです。また、1番の角から3番の角へ向かう線は45度に曲がっており、この角は最も小さく、ジーヴァートマを表す角とされます。2番目のアートマの角は1番目に似ているものの、やや大きく見えます。3番目の角であるパラマートマは他の二つとは異なり、長く伸びたような形をしています。身体の中で双子の魂とされるジーヴァートマとアートマは上と下に配置され、パラマートマは特別に一方の側に位置しています。これは我々の手の平に見られる線と同じように、双子の魂が一方に、パラマートマが別に存在していることを意味しており、この三角形構造（トライタカラ）は非常に深い意味を持つものです。三魂の原理に則った形状が海上にも存在していることは、極めて象徴的です。図で示されているように、大西洋には立ち入り禁止の区域があり、そこに船や飛行機が入ると、どこへ行ったのかわからなくなってしまいます。

この謎を解明しようとした世界中の最も優れた知識人たちも、消えてしまいました。最終的に、その区域は誰にも理解されることなく封印され、誰も立ち入ることのない禁止区域と宣言されました。その海域の三角形区域には不滅の魂の力が宿っており、不滅の魂は「私は一人では存在しない」と語り、その存在の印として、常に片側にジーヴ

ァートマ、もう片側にパラマートマを伴い、三角形を形成しています。この三魂の知識を理解する者こそが、不滅の魂の知識を持つ知者（アートマ・グニャーニ）となりうるのです。不滅の魂の知者でなければ、たとえ他の分野で地球上最高の知識を持っていたとしても、不滅の魂はその人を認めません。不滅の魂が尊重するのは、ただアートマ・グニャーニのみです。この原理に照らすなら、バミューダ・トライアングルに入ったパイロットや船長たちはアートマ・グニャーニではなかったため、その力によって彼らとその乗り物は消えてしまったのです。多くの研究者たちも同様に、アートマの知識を持たないままその区域に入り、姿を消してしまいました。もし誰かがアートマ・グニャーニとしてその危険区域に入れば、何も危害は及ばず、逆にその力が彼を守るのです。スピリチュアリストや神聖科学（ブラフマ・ヴィッディヤ）の科学者がその三角形区域に何度出入りしても、彼らには何の危険も起こりません。ですが、これまでそういった人物はその場所に足を踏み入れていないのです。

過去2〜300年間にわたって、アメリカ近くの大西洋にあるバミューダ・トライアングルでは、無数の船や飛行機が一隻ずつ、あるいは一機ずつ消えてきました。人々はそれらが戻ってこなかったこ

とは知っていますが、沈没したのか爆破されたのか、その理由も証拠も知る者はいません。誰もがこの問いに対して、「あれほど教育を受け、科学を研究してきた知識人たちでさえ解明できなかったのだから、自分たちにわかるわけがない」として、話を終わらせてしまいます。しかし、本書でここまで語られてきた内容は、いずれも誰にも知られていなかった秘密です。そのすべてを明らかにしておきながら、最も興味深い部分だけを語らないというのは不自然です。これまでの話は五つの世俗的科学とは関係のないものであり、読者の疑問は第六の科学—神聖科学（ブラフマ・ヴィッディヤ・シャーストラム）に関わるものですから、当然それに応じて説明されるべきなのです。

アメリカのフロリダから出航または到着する船のいくつかは、技術的な故障や他の欠陥により海で沈んだ可能性もありますが、それらがすべてバミューダ・トライアングルで沈んだとは限りません。しかし、1938年3月、長さ426フィート、39人の乗員を乗せ、5500トンの貨物を積んだ巨大な船がイギリスからアメリカへ向かっていた途中で、たった2分で姿を消しました。そしてそれは、まさにバミューダ・トライアングルで起きたことだったのです。1950年以降、同じ場所で船が次々と消えていったことからも、1938年のその船も同じ場

所で消えたと確認されました。なぜ船や飛行機があの場所で消えるのかを知るためには、まずその1938年の事件を詳細に調べる必要があります。5500トンの貨物を積んだその巨大な船は、アメリカのフロリダに向かう途中で誤ってバミューダ・トライアングルに入ってしまいました。その危険性を知らずに航行していたのです。すると、その船の進路上に一つの雲が現れ、船はその雲の中に入りました。船全体が雲に入るのに1分とかからず、船も乗組員も無事でした。何の危害も加えられませんでした。しかし、煙のような小さな雲の中に入ったその船は、それ以降姿を見せることはありませんでした。しばらくして雲が消え去った後も、地上の誰もその船の行方を知ることができませんでした。この事件を観察した者は、次のような疑問を抱くことでしょう—「1分で雲の中に消えた船はどうなったのか？ 事故か破壊か？ 中の人は死んだのか？ 積荷5500トンはどこに行ったのか？ 結局、船は沈没したのか？」。これらの疑問への答えは次章に続きます。

1) 質問：船に何が起きたのですか？

答え：船には何も起きていません。

2) 壊れたのですか？

答え：いいえ。

3) 壊れたのですか？

答え：事故は起きていません。

4) 質問：乗っていた人たちは亡くなったのですか？

答え：誰も亡くなっておらず、怪我人もいません。

5) 質問：船に積まれていた物資はどうなったのですか？

答え：何も起きていません。すべてそのまま残っています。

6) 質問：最終的に船は沈んだのですか？

答え：まったく沈んでいません。

これらの質問への答えを見てみると、誰もが最後に驚いて「もし何も起きていないなら、なぜ船が消えたのか？」と疑問を抱くかもしれません。その答えはこうです。通常、船は1〜2分以内に雲の中へ入り、数分後にはその雲から出てきます。雲に入るまでに起きた出来事だけは把握されていましたが、その後のことはレーダーにも全く感知されませんでした。つまり、船は視覚的には雲から出てこなかったのですが、雲自体は溶けて消えていったのです。さて、ある人は「誰も目撃してお

らず、レーダーも捉えていないのに、どうして『普通は雲から出てきた』などと言えるのか？どこにその根拠があるのか？本当にそれは意識的に、確信を持って語られているのか？」と疑問を投げかけるかもしれません。こうした指摘は当然のもので、誰もが混乱する内容です。起きた出来事を一分単位で精密に追ってみると、次のようなことが明らかになります。

巨大な船はキャプテン・パースローとその補佐たちによって、煙を伴う雲の中へと通常通り進入しました。船は雲に突入してから10〜15分ほどで出てきたと思われます。出た直後、パースロー船長が羅針盤（ディクスチ）を確認すると、進行方向を全く示さず、針があらゆる方向に動いているのを発見しました。もう一つのコンパスも故障しており、スピードメーターも機能していませんでした。どの機器も正常に作動していなかったのです。彼らは「本当にここは大西洋なのか？」と疑念を抱き、当時の通信システムを使って港に電信を送りましたが、返答はありませんでした。船は順調に航行していたため、それほど不安にはならなかったものの、空には太陽がなく、サイクロンのような曇り空が広がっていました。地上のレーダーではすでに船が消失したことが確認されていましたが、船上の人々はそれを知る由もありませんでした。数時間後、突如として海岸が視界に入り

、パースロー船長はその場所がどこなのか全く理解できませんでした。造船所も見当たらず、自分たちがどこにいるのかもわかりませんでした。船長は海岸から約500メートル沖に停船し、ボートを下ろして岸へ向かいました。海面の水が重く感じられ、着岸するとそこがアメリカではないことを理解しました。周囲には誰一人おらず、小さな木すら生えていません。全体的に岩のような地形で、彼らには不快な環境に感じられました。その地に着いてから10〜15分後には、強い眠気と満腹感、あくび、そして眠気に襲われ、座ったままの姿勢で眠ってしまいました。彼らが意識を保っていた間はすべてを覚えていましたが、眠ってしまってからの出来事は何もわかっていません。意識がある間は心が鏡のように機能し、そこに起きたことを反映していましたが、その後の出来事については、想像で語ることしかできません。

質問に戻ってみましょう。船は事故にも遭っておらず、破損もしていません。乗員は誰一人死亡しておらず、怪我もありません。積載物もすべてそのままです。船が岸に到達し、乗員が小舟で上陸し、眠りについたという一連の出来事はすべて事実です。それ以降のことについては、想像によってしか語ることができません。さらに、1938年の

事件の後、1947年12月5日にはアメリカの戦闘機6機が消失しました。この出来事についても直接的に説明しましょう。

アメリカ空軍は、海上の指定地点を爆撃する訓練として、5機の訓練機に出撃命令を出しました。計画では、先導機1機が前方を飛行し、続く5機に現地の状況を伝えた上で、その地点を爆撃させるというものでした。　彼らの目的は、5機の航空機を同時に離陸させ、500キロメートル先に指定された標的を爆撃することだった。まず先導機が離陸し、数分差で残りの5機も出発しました。1938年に消失した船の事件から9年後、1947年にこの航空機消失事件が起きたわけです。当時、海上に三角形の異常地帯が存在することは誰にも知られていませんでしたが、1950年9月16日、ある船が消失したことで、その異常区域が特定され、「バミューダ・トライアングル」と名付けられるに至ったのです。それまで証拠を持ってこの地帯の存在を把握していた人はいませんでした。先導機がこの三角形の海域に進入すると、パイロットは自機の速度、高度、方位すらわからなくなりました。すべての計器が狂い、電源を入れていない照明が勝手に点灯し、地上との無線通信も切断されてしまいました。白い雲が周囲に現れ、最終的には

その中央に洞窟のような空間が出現し、そこへ機体が吸い込まれていきました。

パイロットはしばらくして、自分が地上に着陸していることに気づきました。しかし、着陸地点は滑走路ではなく通常の地面でした。驚いたことに、彼の後を追っていた5機の戦闘機も少し離れた場所に着陸しているのが見えました。まるで夢のように感じられたその体験に、彼は思考が停止し、そのまま眠ってしまいました。この出来事は多くの人にとって信じがたく、作り話とさえ思われるかもしれません。しかし、研究的な視点で検証すれば、ある程度の理解には至るかもしれません。

1938年の船の消失と1947年の戦闘機6機の消失は、世界中の人々の目には、「完全に消息不明」として捉えられてきました。しかし、当時の乗員たちの記憶には、それ以前の出来事がしっかりと記録されていました。彼らが眠りに落ちた時点で、その記憶の記録も止まってしまったのです。すでに起きた出来事を後から心で知るのは非常に難しく、そのためには心を空にし、意識を集中させ、強い意志でその情報に到達する必要があります。

それは「神聖な統一」（ブラフマ・ヨーガ）と呼ばれる状態です。その状態に達した者のみが、過去の記憶を他者の心から読み取ることができます。しかし、この統一状態に入ること自体も極めて困難であり、さらにその中で眠らずに意識を保てる者はほとんどいません。ほとんどの人は、そのまま眠りに入ってしまいます。そういった努力を通じてのみ、過去の出来事の真相を知ることができます。もし過去の記憶が本人の意識に残っていない場合は、それを知ることはできません。1938年と1947年の事件についても、彼らが意識を保っていた間の出来事しか明らかになっていません。眠って以降に起きたことは、想像で語るしかなく、それが真実かどうかは断定できません。

説明されたように、この問題はそれほど簡単ではありません。たとえ誰かが自分の「心（マインド）」を完全に制御し、動揺させずに静止させ、最終的に「神聖な統一（ディヴァイン・ユニフィケーション）」の境地に達したとしても、その前に知りたいと思っていた事柄を、その統一の中で忘れてしまう可能性があります。100人中およそ90人は、この「神聖な統一」の境地から直接眠りに入ってしまいます。眠らずに意識を保ち、かつ強い精神的な意志（メンタル・ディターミネーショ

ン）を持つ者のみが、自分が知りたい「過去の出来事」に関係する人物の心にアクセスし、そこから情報を直接視覚化することができるのです。過去の出来事を知ることは、神聖な統一に達することよりもはるかに難しいのです。強い意志を持つ者ならば、その人物の意識を通じて過去の秘密を探ることができます。しかしそれには、まず自らの意識を完全に制御し、睡魔を克服しなければなりません。過去の出来事を知るためには、継続的な努力が必要であり、最終的には自分の力でそれを見つけ出すことが可能になります。つまり、過去の人物の意識（マインド）を通じて情報を引き出すことも可能なのです。しかし、その人物の心がすでに眠ってしまい、その出来事を忘れてしまっていた場合、その情報はもう知ることができません。1938年と1947年に起こった情報は、彼らが意識を保っていた時間までしかわかっていないのです。彼らが眠りに落ち、意識が記憶できなくなった時点以降に何が起こったかは、もうわかりません。

その後に起こった出来事については、想像や仮定によってしか語ることができません。それが真実か虚構かは断言できません。これまでに語られてきた船や航空機に関する情報は、すでに実際に起

こったことであるため「真実」と言えます。船の消失と6機の航空機の消失は異なる時期に発生しましたが、細部の違いこそあれ、基本的にはほぼ同じような流れで起こりました。船の場合、雲を抜けたあと海上を航行し、乗員たちは小さなボートで岸にたどり着きました。航空機の場合、雲が消散したとき、パイロットは自機が地上に着陸していることに気づき、さらに後続の5機もすでに着陸しているのを確認しました。外部の世界から見れば、船も航空機も、雲に突入したその瞬間に「消失」したのです。しかしスピリチュアリズムの視点から見ると、それらは明確に「存在」していました。ここで、さらに多くの疑問が生まれます。誰がその巨大な船を、乗組員の気づかぬうちに未知の海岸へ導いたのか？なぜその雲が出現したのか？なぜ雲を抜けたとき、見知らぬ場所にいたのか？航空機はどうやって着陸したのか？なぜ後続の5機も同じ場所に導かれたのか？なぜ雲は船や航空機にだけ現れたのか？彼らがたどり着いたその岸や地面は、どこなのか？これらの問いに対して、パイロットやパースロー船長から答えを得ることはできません。なぜなら、彼らは「眠りに落ちて」しまったからです。よって、これらの疑問に答える唯一の方法は「想像」によるものです。そして、仮説的に明らかになったことの中には、真実であるものもあれば、そうでないものも

あるかもしれません。私は、これから話す内容のすべてが「真実である」とは断言しません。

私の見解では、1938年に消失したそのイギリス船は、非常に強力な「三角形の力」を持つ海域に侵入したのです。キャプテン・パースローもその乗組員たちも、誰一人として「神聖な知識（ディヴァイン・ナレッジ）」を持っていませんでした。あの領域に入るには、神への信仰と神聖な知識を有している必要があります。そうでなければ、その力は「怒り」を示します。それには理由があります。トレータ・ユガの時代、不滅の魂の力（アートマ・シャクティ）はインド洋に存在しており、その力の一部はラーヴァナ・ブラフマーとしてスリランカに生まれました。彼は「知識」「統一（ヨーガ）」「解脱（モークシャ）」とは何かを人類に示すために実践しました。この不滅の魂の力は、小さな一部を人間の姿にしてラーヴァナ・ブラフマーとして降臨させ、人々に教えを広めようとしました。しかし、古代も現代も人々は無知に覆われ、彼の栄光を理解しようともせず、ついには彼を「無知で残忍、女好き」と非難しました。そのため、海に宿る力は怒りを抱いたのです。インド洋に存在したこの三角形の力は、現在では大西洋に場所を移していますが、その本質は同じ

であり、ラーヴァナ・ブラフマーもまたその一部なのです。人々が彼を悪し様に語るのを見て、彼（ラーヴァナ・ブラフマー）は怒らないでしょうか？ 無知な人間がその海域に入ったとき、その力は怒りを示すのです。しかし、その力は彼らを痛めつけることなく、むしろ「知者（グナニ）」へと変化させる機会を与えたのです。それは一種の罰として、人々を永遠に家族から引き離しました。彼らにとってはそれが「過酷な罰」に感じられるかもしれませんが、この力にとっては「小さな罰」に過ぎません。神聖な知識を知らぬ者にとっては、それが「極めて厳しい罰」と感じられるだけなのです。

著作**『Dayyala – Bhutala Yadartha Sanghatanalu（悪魔と幽霊——真実の出来事）』**の中では、「雲は神の王国と統治において重要な役割を果たしており、その雲が行う活動についても説明されている」と述べられています。三角形の形で海上に存在する力の意図を理解した雲は、船から1キロメートル離れた場所に小さな形で現れ、すぐにその形を大きくしました。船が近づくにつれ雲はさらに拡大し、船が中に入った瞬間、それを取り囲んで全てを見えなくしました。約10～15分後、乗組員たちは雲を抜け出たことを理解しましたが、その

間に「想像を絶し、知られることも解明されることもない」出来事が起こったのです。そのわずかな時間の中で、雲はあれほど巨大な船を、何百万マイルも離れた惑星へと運び去ったのです。その惑星はこの太陽系には属しておらず、そこにも海が存在していました。驚くべきことに、雲はその惑星の海岸近くの海に船を降ろしました。船はその海を通常通り航行していたため、雲が離れたときも船内の人々には疑う余地がなかったのです。やがて海岸が見えてきたとき、彼らは「航路を間違えた」と感じ、自分たちの船が地球の表面を離れてしまったことに気づかなかったのです。

彼らは小舟で海岸にたどり着き、自分たちの船を海に停泊させたまま、その場所がどこの国のどの地域に属するのか全く見当がつきませんでした。その間に、彼らをそこへ運んだ雲が彼らを眠気と眠りへと導き、1時間後に目を覚ましました。その1時間の間に、彼らの記憶はまるでコンピューターのデータが削除されるかのように完全に消去されました。それにより彼らは過去をすっかり忘れ、自分たちが地球の表面に属していたことさえ知らず、船に乗っていた記憶もありませんでした。彼らは過去の精神的な記憶を失い、その後に何が起こったのかを直接知ることはできず、想像によってのみ語ることができます。眠りに落ちて目覚めた瞬間、彼らはまるで「新たな誕生」

を迎えたかのように感じました。過去の記憶が失われた今、それはまさに前世が消えたことを意味しています。身体も生まれも変わっていませんが、実質的には新しい人生の始まりと同じでした。そこには地球の陸地と同じように人々が暮らしており、彼らは優れた神聖な知識を有していました。地球から連れてこられた人々もその知識人たちと混じり合い、現地の人々とともに暮らす中で知的な存在へと変わっていきました。ある意味で、地球から消えた彼らにとってこれは罰でありましたが、最終的には知識人へと変化することで報われたのです。つまり、この一隻の船の背後には、これほどまでに深い物語があったのです。そしてこれらすべてが起こった理由は、大西洋の三角形の場所にありました。

さらに、1947年に起きたアメリカの戦闘機失踪事件についても触れることができます。その日、最初にパイロット機が、数分後に5機の戦闘機が飛び立ちました。アメリカ・フロリダから飛び立った最初の機は、三角形の上空を飛行しながら約500km進みましたが、その時点で通信システムが完全に機能停止し、地上からの接続が途切れました。その後方100kmを飛行していた5機の戦闘機も通信不能に陥り、計器類がすべて動作を停止しました。これにより、高度、速度、目的地までの距離の把握ができず、パイロットは混乱状態に

陥りました。必死に操縦を続けていたその時、機体の周囲に雲が現れ、機体はその中央の真空地帯を飛行していました。さらに進むと白い雲が現れ、機体はその中へと突入しました。その後、パイロットは雲が機体から離れ、自分の機体がすでに着陸していることに気づきました。後続の5機も離れた場所に着陸していました。その後、パイロットは眠気に襲われ、眠ってしまいました。

　　驚くべきことに、後続の5機のパイロットたちにも同様の出来事が起こり、彼らも雲の中に入り、雲を抜けた時にはすでに地上に着陸していました。その後、彼らも眠りについてしまいました。彼らは何が起こったのかを知ることができず、想像によってのみ説明が可能です。想像によって語られることは、必ずしも完全に正確とは限らず、しかし、機体が地上に着陸したという事実までは正確です。飛行機に乗っていた人々は1時間後に目を覚まし、それまで持っていた記憶を失っていました。船に乗っていた人々と同様に、彼らも過去の記憶を忘れ、自分が誰であるかも分からなくなっていたのです。驚くべきことに、航空機も船と同様に、同じ惑星へと移動していたのです。アメリカとイギリスの人々は、航空機と船の乗員が同じ惑星に到着していたことを知りませんで

した。

　　両国から来た人々は同じ惑星に降り立ち、自分自身について語る記憶さえ失っていました。彼らはその惑星に元々住んでいた人々と混じり合い、同化していきました。その惑星の人々は身長が7〜9フィートあり、5〜6フィートの彼らは背が低く、知能も劣っているように見えました。航空機や船を操縦する知識を持っていたとはいえ、現地の人々と比べると知的には劣っていたのです。現地の人々はすべての分野において優れていただけでなく、霊的な分野でも非常に高い水準を誇っていました。もし誰かが神聖な知識を持たず無知なままであれば、その人物は村に入ることを禁じられ、追い出されていました。彼らは「神聖な知識を持たずに生まれてくることは間違いだ」と考えていたのです。その惑星の人々は皆、神聖な知識とともに平和に暮らしていました。地球のような政治的駆け引きもなく、最も高い知性と修行を積んだ人物のみが王となり、その王の下で統治にあたる者たちも皆、神聖な知識を有していました。地球から来た人々もその地に留まり、やがて彼らのように知性ある存在へと変わっていきました。

　　その地域の人々は、地球から来た人々に対して特に関心を持っていませんでした。彼らは「

彼らは誰なのか？どこから来たのか？」とさえ考えませんでした。というのも、彼らは以前からこうした新しい人間や動物が時折やって来ることを知っていたからです。また、かつてはその土地に存在しなかった人々や動物たちが現れることもあったと知っており、それらを運んできてそこに置いたのは自分たちに見えない“力”であることも理解していました。彼らはこうも語っていました。「ここにやって来た新参者たちは、かつて自分たちが犯した罪への罰としてこの地に連れてこられたのだ。その見えない力が、彼らを家族や故郷から切り離し、ここに連れてきたのだ」と。そして、その惑星の住民たちは皆、知性を備えており、その背後には神が存在していると信じていました。

その地の住民たちは、「目に見えない力が罪を犯した者たちを罰するために彼らを連れてくるのだ」と語っており、それは事実であると認めざるを得ません。なぜなら、同様のことは地球上でも実際に起きており、ただ人々が無知で気づかずにいるだけだからです。地球上で起きた事例のいくつかを分析すれば、彼らの言うことが真実であることが分かるでしょう。政府の法の下では、罪を犯した者は罰を受けます。たとえば、裁判所によって有罪判決を受けた者は刑務所に収容され、家族

や友人との接触を断たれること自体が「罰」となります。同様に、神に対して反社会的な罪を犯した者は、「目に見えない力」によって家族や親しい人々と引き離されるという形での罰を受けるのです。

ここで「でも記憶を失っているなら、家族への想いで苦しむこともないのでは？ それは罰と言えるのか？」という疑問を持つ人もいるでしょう。これは非常に合理的な問いです。バミューダ・トライアングル（三角形の領域）から移動した雲には2つの目的があります。1つは人間がその「カルマ」に基づく罰を受けること、もう1つは「知識を得ること」です。罰はカルマに従って与えられますが、知識はカルマではなく「熱意（シュラッダ）」によって得られます。地球から連れてこられた人々には知識への熱意がなかったため、彼らは知識を得ることができず、知性ある者にはなれませんでした。記憶を失っているため、前世に関する苦悩を感じることはありません。しかしその一方で、苦しみも快楽も感じない「無知」の状態でもあるのです。では、「記憶も熱意もない者をわざわざ連れてくる意味があるのか？」という疑問も湧くでしょう。しかし、目に見えない力が一度作業を行えば、必ず目的が達成されます。記憶や熱意が不足している状態であっても、片方では罰を受け、もう片方では知識を得るような状況が生

まれるのです。

神は人間が「不可能なことを可能と感じられる経験」をあらかじめ与えています。それが「夢」です。夢の中では、現実では不可能なことが体験できます。例えば人間が空を飛ぶことは現実にはできませんが、夢の中では鳥のように飛ぶ体験ができます。記憶を失った人々も、夢の中で過去の記憶や苦しみを再体験することがあります。夢には時間の概念が曖昧で、現実で1年間かけて経験するような苦しみが、わずか10分で終わることもあります。犬がライオンに変わるといった、時間も形も急速に変化するのが夢の特徴です。夢を通して、過去に起きたことや、自分が意識していなかったことを体験することもあります。

このように、別の惑星に移された人々は記憶を失っていたとしても、「カルマ（宿命）」による経験は消えていません。バガヴァッド・ギーターにも「シュラッダーヴァーン・ラバテー・ギャーナム（信念ある者のみが知識を得る）」とあるように、知識は熱意によってのみ得られるものです。古来の賢者たちも、「熱意が強い者ほど、多くの知識を得られる」と述べています。三角形の力は、地球から45人の人間を他の惑星へと移しましたが、彼らには神への関心も、神聖な知識への関心もありませんでした。熱意がなければ、知識を得

ることはできません。ここには、ひとつの科学的法則があります。それは「色に触れれば、その色が染み付く」という法則です。知識にも同じことが言えます。知識への熱意がない者は、知識を得ようともせず、知識に触れることもできません。では、そういう者は一生知識を得られないのでしょうか？ 神自身がバガヴァーンとして、「熱意ある者のみが知識を得る」と宣言しています。それに対して別の答えはありません。これは人間側からの視点ですが、神の側からはまた別の答えが存在します。その理解を助けるために、ある小さな例で説明しましょう。

1981年、私はマドラス（現チェンナイ）のマリーナビーチに座っていました。夕方だったため、人々で賑わっていました。屋台の売り子たちがあちこちで食べ物を売っていました。その中に、茹でた落花生を籠に入れて売っている男がいて、私の前で「茹で落花生はいかがですか」と大声で叫んでいました。私は特に落花生に興味がなかったため、何も買いませんでした。しかしその売り子は、5分おきに3〜4回通りかかり、「この落花生は本当においしいですよ」と叫び続けました。そのうち彼は私のところへ来て、「買わなくても構いません、暇つぶしにどうぞ」と言って、私の手に4粒の落花生を乗せてくれました。無料でもらったので断る理由もなく、私はそれを受け取り、食

べてみました。すると美味しいと感じ、「もっと食べたいな」という気持ちになりました。最初は買う気はなかったのに、無料でもらったことに恩義を感じて買おうと思ったのです。結局、私は落花生を買って食べました。

ある人が神聖な知識に全く興味がなく、知ろうとさえしなかった。彼は何度も説法を聞いたことがあったとしても、知識に触れることもなく、説いている人に関心も持ちませんでした。まるで私は落花生に興味がなかったように。しかし師（グル）は、そういった熱意のない者を見て、まずは無料で少しだけ知識を授けようとします。その最初の一粒が、その人の中に「もっと知りたい」という気持ちを芽生えさせ、やがて本当の意味での「熱意」を生み、知識への道が開かれていくのです。私が最初に興味のなかった落花生を試食で食べ、最終的に自分の意志で買ったように、神の力もまた、最初は無料で知識の種をまき、それによって人間に知識への熱意を芽生えさせるのです。

神聖な力は、地球上の無知の密度を抑制するために、このような行動を取ります。神が知識への「熱意」を人間に植え付けると、その後は各人の熱意に応じて知識を獲得する責任が生じます。1938年と1947年に地球から連れて行かれた人々は、ある意味では与えられた熱意によって知識を

得ることができ、夢の中で自らの罪業の結果も体験しました。三角形の神聖な力の場に入った人々を雲が別の惑星へと運び、彼らに一方では「カルマ」による罰を、他方では知識の授与という経験をさせたのです。雲は知識とは関係なく、「運命＝カルマ」に基づく罰を人々に与えました。雲は、生き物を一か所から別の場所へと移動させ、その運命を体験させるのです。このような作用を観察すれば、大西洋上での人々の消失は雲によるものであったと理解できます。雲は、地上のある場所で生き物たちを見えなくし、別の場所で姿を現させることで、彼らの行動を証明しているのです。このような現象は地上でも起こっているにもかかわらず、人間の頭脳ではすぐには理解できないのです。本書『悪霊と幽霊 ― 真実の出来事』でも以前に説明されていたように、雲はカルマに従って個人または集団の居場所を変えているのです。

2010年9月、ハイデラバード市では季節風の影響により大雨が降りました。低地はすべて冠水し、ある高層ビル建設予定地の地下に掘られたセラー（地下室）にも水が流れ込みました。地元の人々が2日後の朝にその場所を見に行くと、なんと全長12フィートのワニがその地下にいるのを発見しました。そのニュースはすぐに広まり、森林局の職員たちがやって来てワニを捕獲しましたが、誰もそのワニがどうやってそこに来たのか理

解できませんでした。ハイデラバード近郊には、ワニが生息できるような川も森林も池もなく、周囲200〜300キロの範囲にはワニの目撃情報も存在していませんでした。つまりワニがそこに自力でやってくる可能性は極めて低く、特に雨季で水源が豊富な時期に人混みの多い都市に現れる理由は見つかりません。仮に誰かがそのワニを持ち込んで地下に放したのであれば、証拠も目撃も必要になりますが、それもありません。では、どうやってワニが現れたのでしょうか？答えはひとつです。1938年に船が、1947年に6機の軍用機がバミューダ・トライアングルから消えて、何百万キロも離れた別の惑星に運ばれたのと同様に、このワニも雲によって地下に運ばれたのです。雲がそんなことをできるのかと驚くかもしれませんが、6機の飛行機を数分で移動させた雲が、ワニを数時間かけて空に隠しながら運ぶことも可能だったのです。このようなことは、すでに『悪霊と幽霊 — 真実の出来事』で詳しく説明されています。形を変えて消えることができる雲は、あらゆるものを密かに中に隠し、目に見えなくすることができるのです。

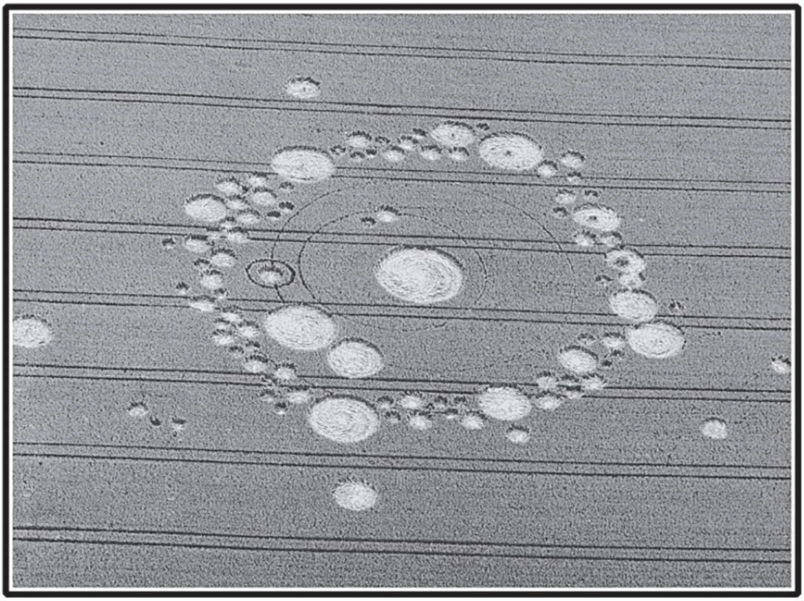
誰もが信じがたいとしても、巨大な船や6機の飛行機がバミューダ・トライアングルから姿を消したのは事実であり、それを否定することはできません。バミューダ・トライアングルには三

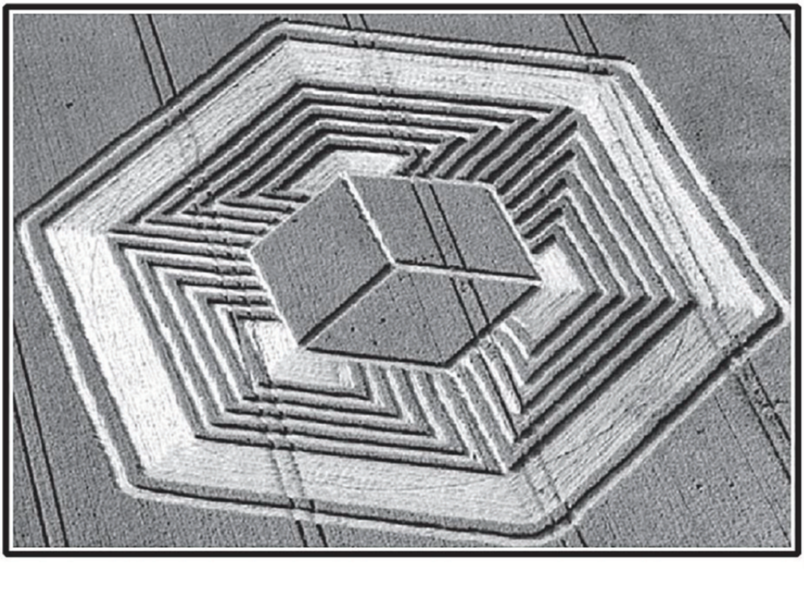
角形に広がった神聖な力が存在しています。神の支配の中で重要な役割を果たす雲たちは、大西洋上に存在するこの三角形の力に触れることでその力を得ているのです。三角形の力に触れた雲は完全に活性化し、地上の生物にも影響を及ぼすようになります。「目に見えるものしか信じない」「見えないものは科学ではない」と主張する人々は、実はそれが無知によるものであることに気づいていません。そんな人々にも「目に見えないものの存在」を認めさせようと、雲たちは大地の上でも特別な行動を見せてきました。多くの人がそれに気づかず、理解できないまま見過ごしています。説明されなければ、それは科学になりません。雲の行動すべてを理解することはできなくても、そのうちのいくつかを知ることは可能であり、それを知らなければ「科学が分からない」「知識人ではない」と言われても仕方がないのです。

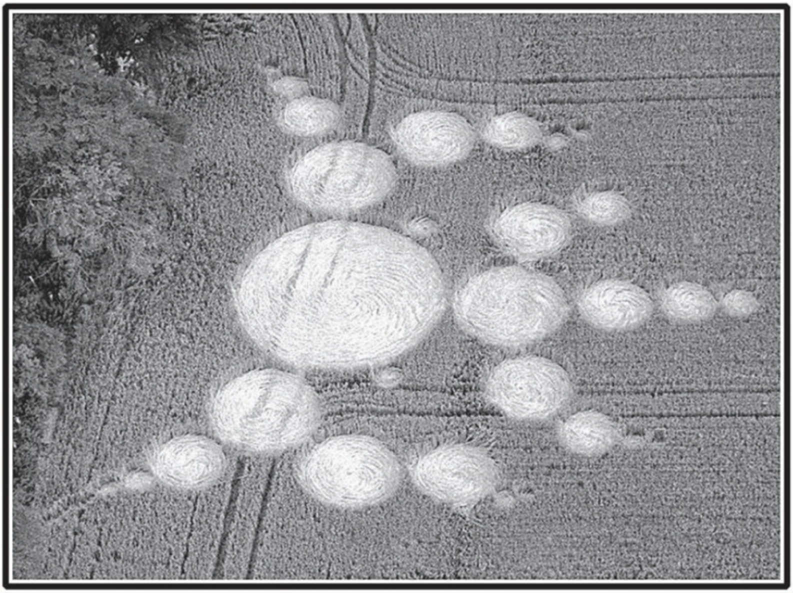
　　雲はこう語っているかのようです。「お前たちは我々のことを何も知らない。この出来事を見たなら、せめて我々について理解しようとするべきだ」と。雲は地上で一種の挑戦として人類に対し活動を行ってきたのです。ここで、雲が実際に地上で行ったが人類には理解されていない特異な活動について、ひとつ例を挙げて詳しく説明します。アメリカの三角形地帯の近くで、雲は奇妙な行動を取りました。ある日、3人の人物が特殊

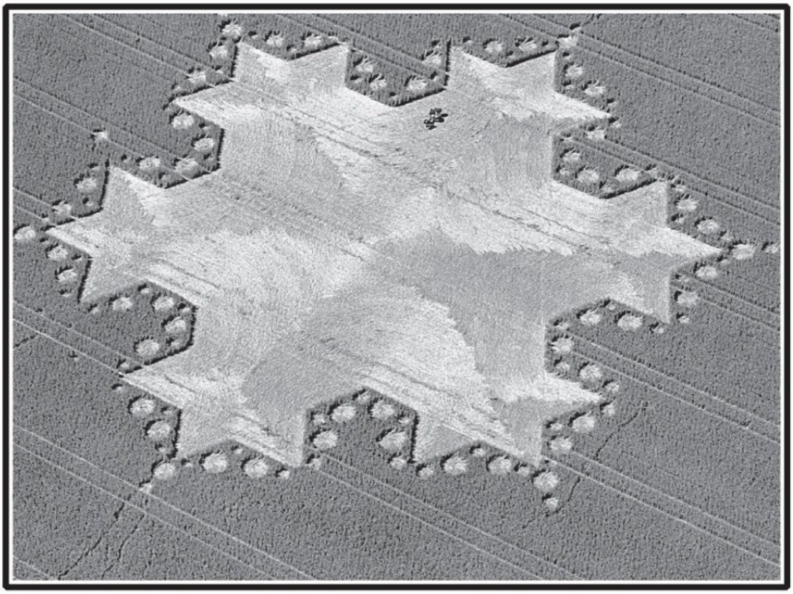
任務のため小型機に乗って飛行しており、その中の一人が下の土地を観察していました。彼らの航路上には、特別な種類の岩石地帯があり、それを上空から観察しようとしていたのです。まっすぐで高さのある岩が立ち並ぶその場所は、一面が小麦畑に囲まれていました。

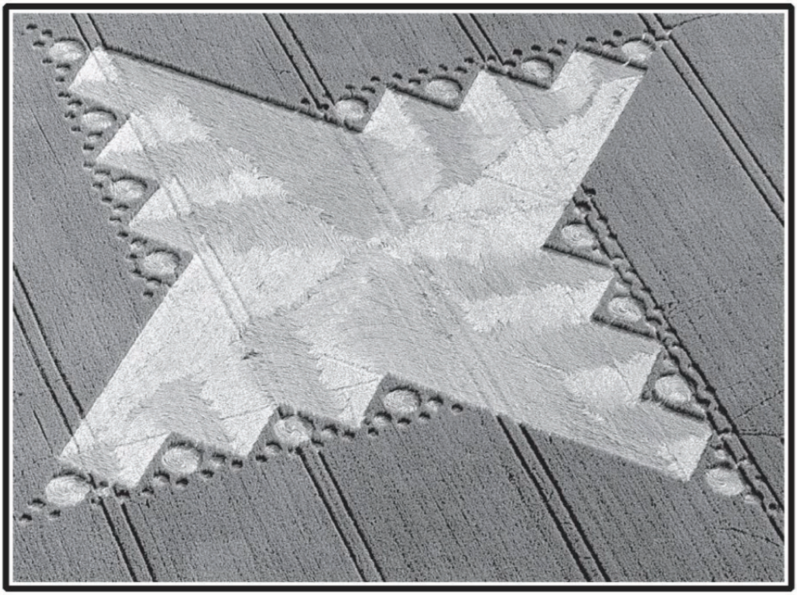
彼らは任務を終えて同じ航路で1時間後に戻ってきましたが、そのとき、岩石の隣の平野に一つの「正方形の絵」のような形ができているのを上空から見つけたのです。それは成長した小麦畑の中に、数百人が働いても完成できないほど複雑で巨大な模様でした。一部の小麦は地面に寝かされ、他の部分は立ったままで、それが上空から見ると一枚の巨大な絵のように見えたのです。この模様は長さ1キロメートルに及び、地上からは全貌を見ることができません。飛行機やヘリコプターのように上空からでなければ、その図形は完全には把握できません。その模様の写真は上空から撮影されたものであり、次のページに掲載されています。ご覧ください。

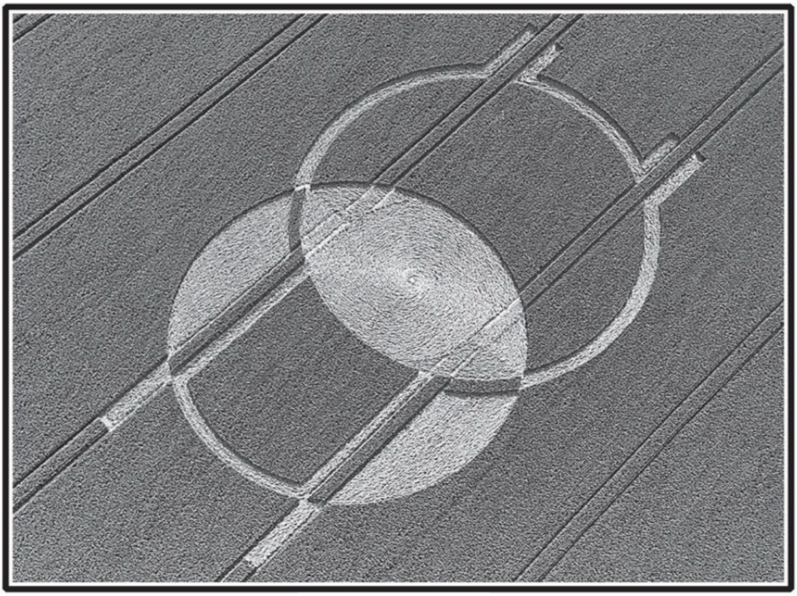


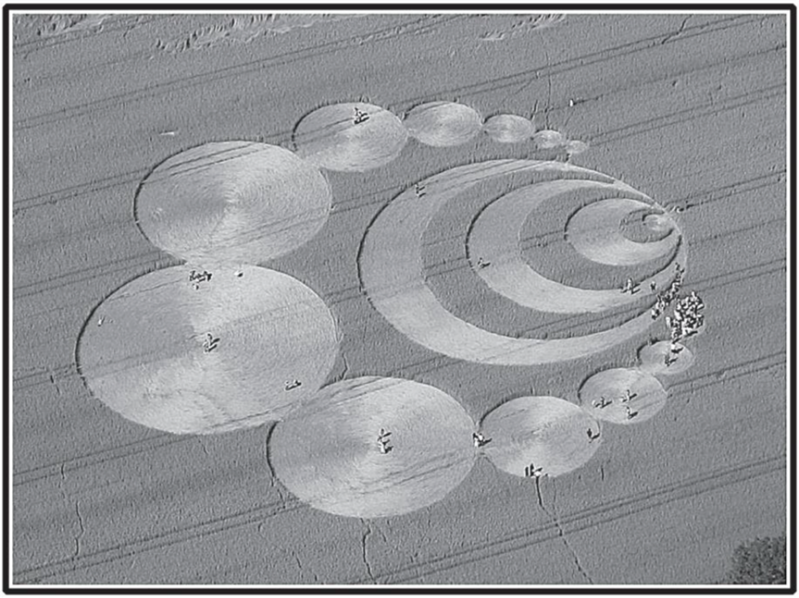


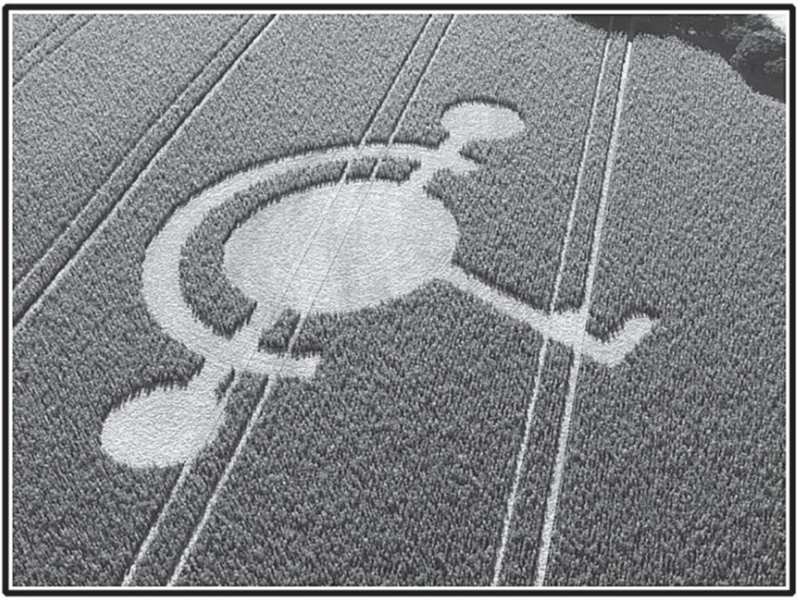


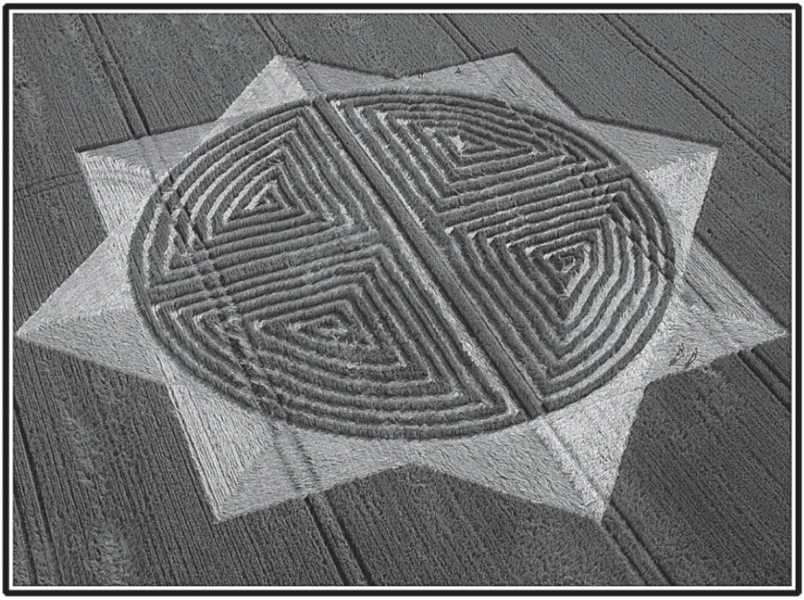


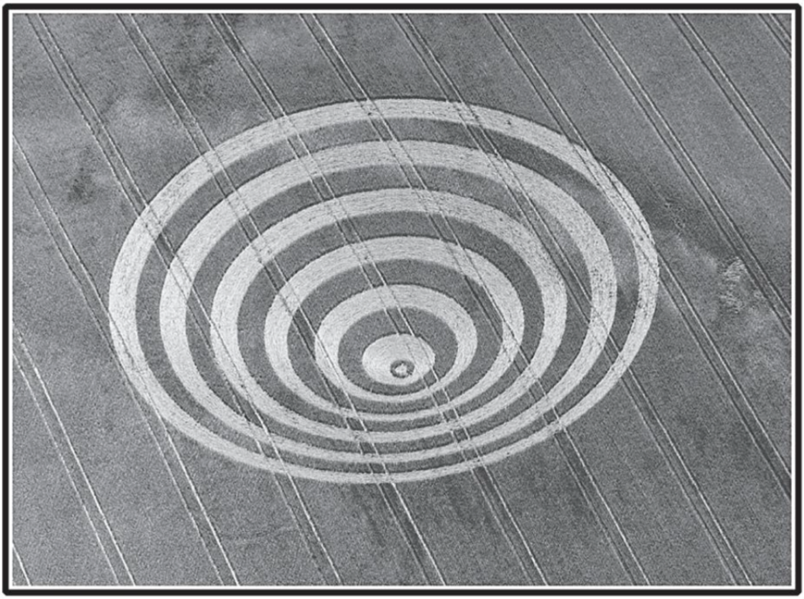


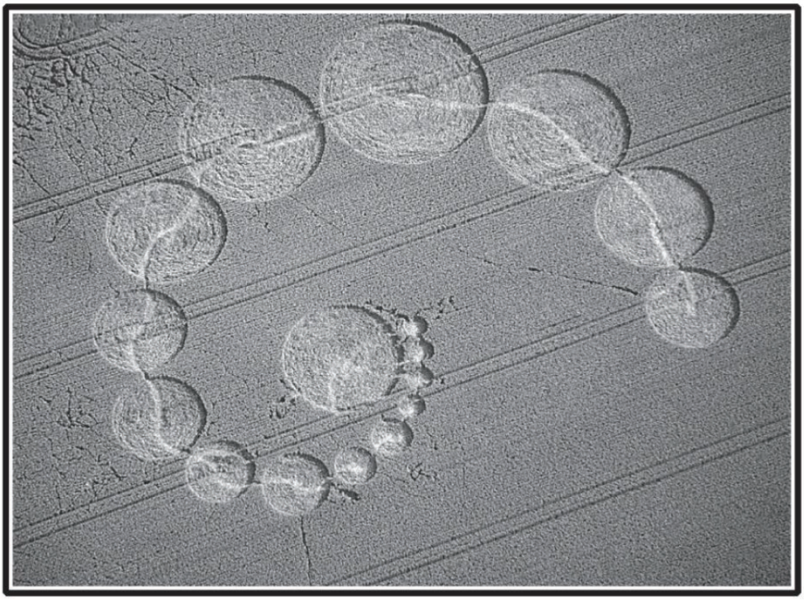


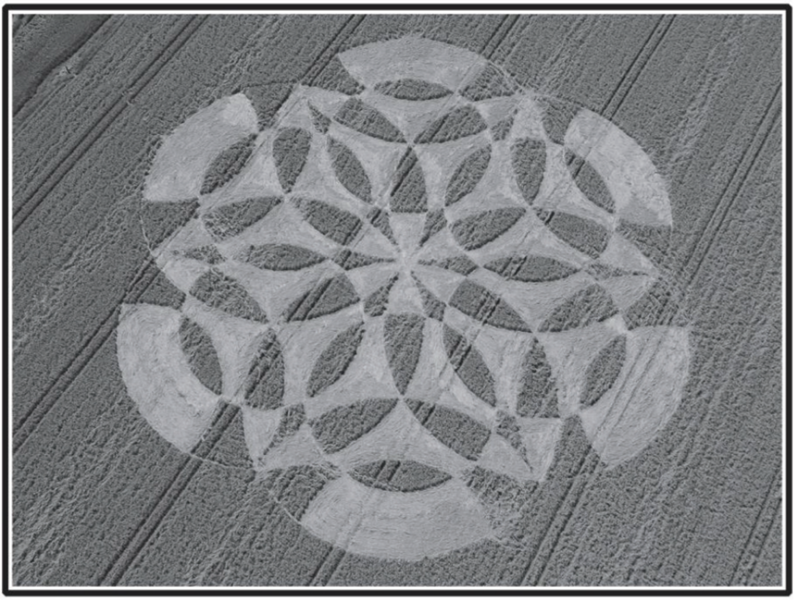


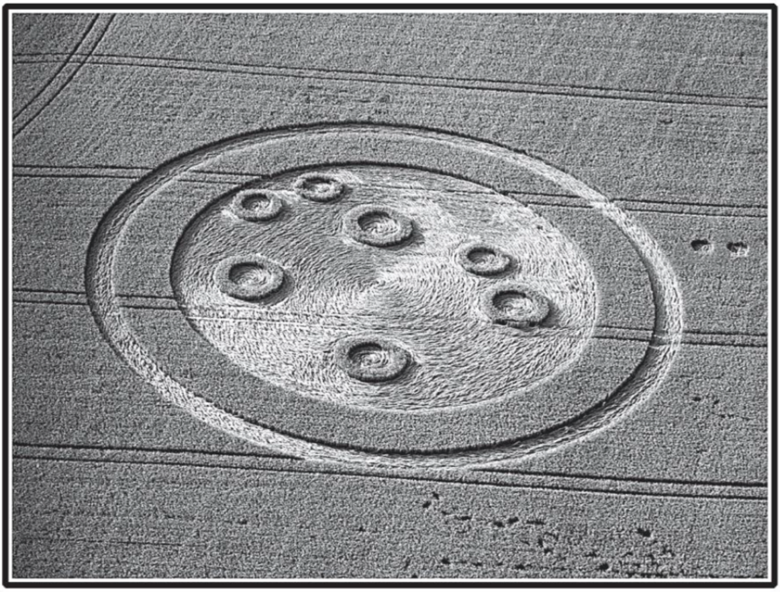


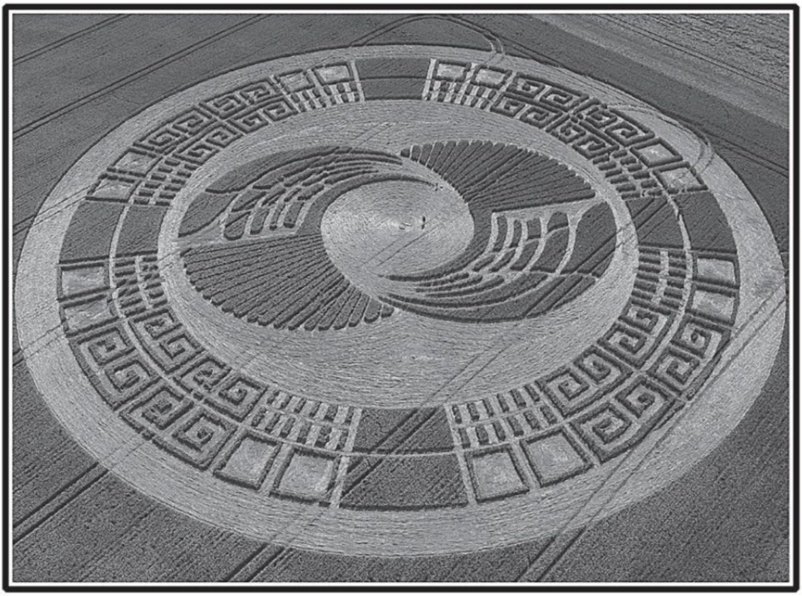


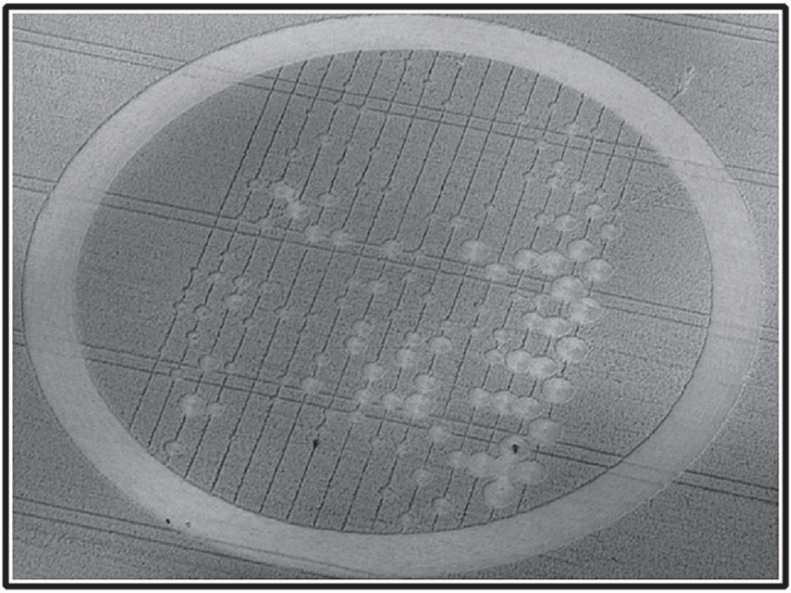


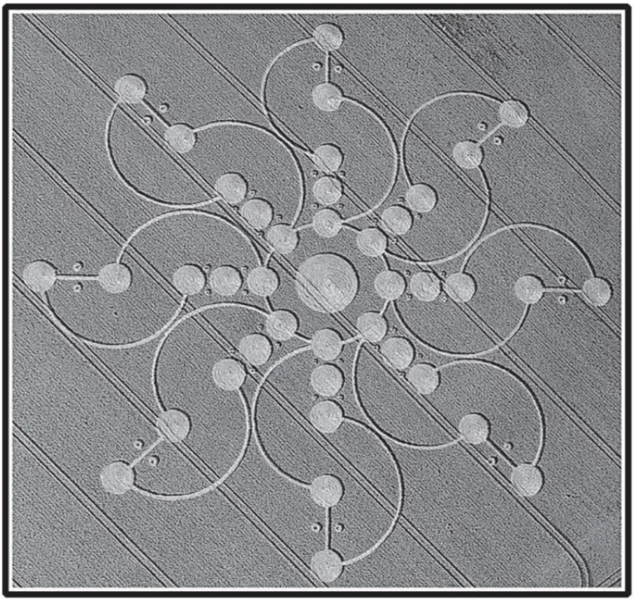


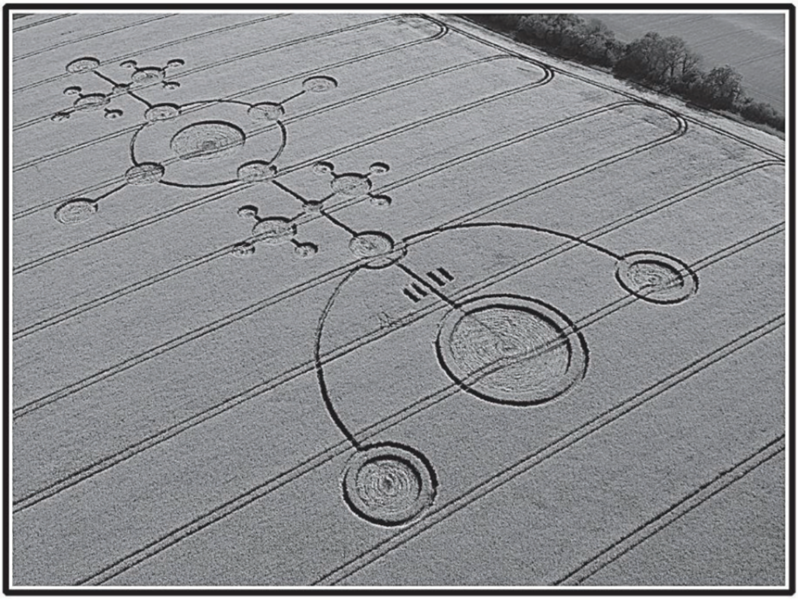


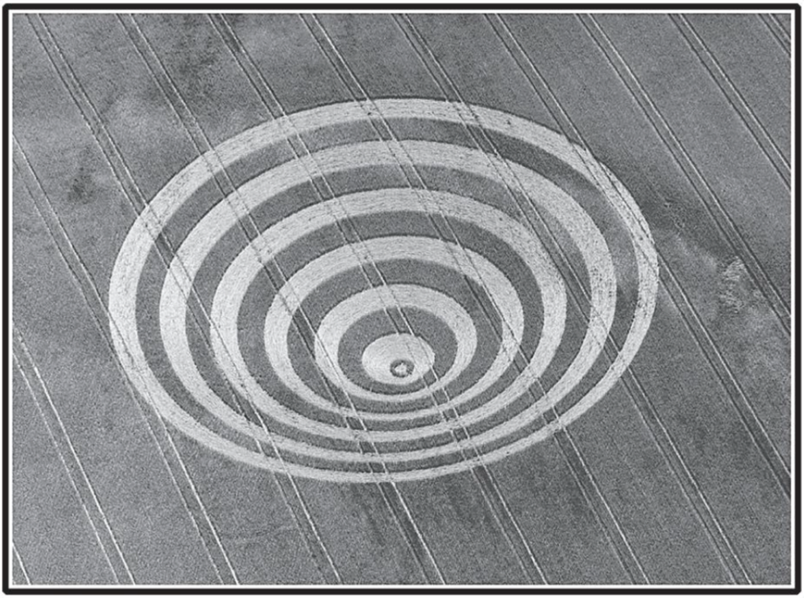


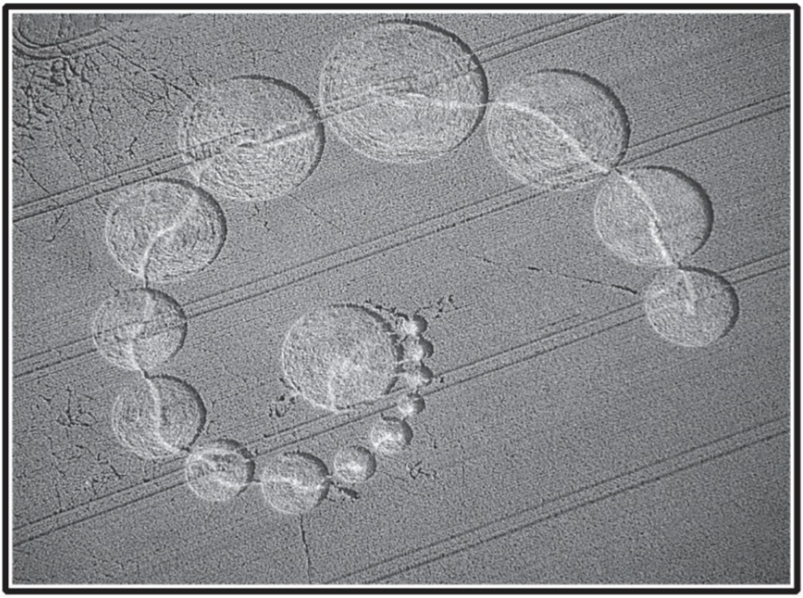












それらの形は、アメリカ大陸のある場所で一晩のうちに絵のように作られたものであり、人間によって描かれたものではありませんでした。それを見た多くの人々が「クロップ・サークル」と呼び、さまざまな意見が飛び交いました。無神論者の中には「すべて人間が作ったものだ」と言う人もいれば、「人間には不可能で、何か見えざる力が作ったに違いない」と認める人もいます。中には、人間にも作れることを証明しようとして形を描いた人たちもいましたが、そうした絵はすぐに人の手によるものと判別されました。木の板などを使って作物を押し倒し、形を作ろうとした人たちもいましたが、穂は完全に地面に倒れきらず、どれだけ押し込んでも元に戻ってしまい、形に明瞭さが出ませんでした。人間が作った形には明確な違いがあり、一晩で誰にも見られずにできた形は人間によるものではないと分かります。人間が描くには時間も人数も必要ですが、数分で誰にも気づかれずにできたこれらの図形は、明らかに人の仕業ではないのです。では、どのように作られたのか、どんな力がそれを生み出したのか——その答えは今も謎のままです。

ナショナルジオグラフィックTVチャンネルでは、さまざまな形状のクロップ・サークルが「ヤタールタ・カタル（真実の物語）」という番組名で紹

介されました。番組の中では、これらのクロップ・サークルが今なお謎であると語られました。誰もそれらについて知らなかった頃から、すでに「この現象は雲が行っている活動である」と本書では述べられていました。雲が、自らの力の存在を証明するために、わずか数分でこのようなクロップ・サークルを作ったのです。それらの図形はまるで芸術家が描いたかのように見え、麦の穂はくっきりと地面に倒れており、上空からはっきりとその絵が見えます。これらの図形は、雲によって描かれたものであり、人間の想像には及ばないものです。それらは、地面にチョークで描いた図や玩具の形とも違い、この地球上にあるどのような形とも一致しないものでした。

ミステリー・サークルの形には意味があるのか？

観察してみると、ミステリー・サークル（Crop Circles）の形は地球上のどこにも存在せず、人間が作り出したものでもなく、農地にこれほど大きな図形を描くことには何らかの意味があるはずです。特定の寸法でその形が作られた意図を明らかにするためには、まずそれを「誰が作ったのか」を知る必要があります。得られている情報によれ

ば、それらは「雲」が作ったとされ、人々の見方では何らかの「目に見えない力」が作り出したと考えられています。ある農夫が夜遅く、畑仕事を終えてトラクターを運転して家に帰っていると、遠くの空に2つの大きな電球のような光が見えました。それらは地上ではなく、約60〜70フィートの上空に光っており、非常に速く彼の方に向かってくるように見えました。トラクターが走行していた道を、その光は時速100キロほどで追い越して進んでいったのです。このような光景は農夫の他にも何人かが時折目撃しており、その正体は誰にも分かりませんでした。あまりにも未知の存在だったため、人々は何らかの「超常的な力」がそれらを生み出しているのではないかと考えるようになったのです。

どのように見えたとしても、それらのミステリー・サークルは雲が作ったと結論づけられます。光については、すでに述べたように、雲は神の統治機構の一部であり、神のための奉仕を担っている存在です。同様に、無数の小惑星たちも神のための奉仕をしており、ときに地球上を移動することがあります。目撃されたものが雲ではなく、小惑星のひとつであった可能性もあります。ですが、この宇宙で誰にも果たせない任務を遂行しているのは「雲」であり、小惑星たちはより小さな役割

を担っています。神の王国においても、地上の政府と同様に「生き物（人々）」と「統治する力（神の秩序）」が存在します。人間は一人ひとりの善行や悪行を毎秒ごとに評価されているとは思わず、その実行と処罰が雲や惑星、霊的存在たちによって実行されているとは知らないのです。人間は自分の欲望のままに行動し、他者の苦しみや損失を顧みずに、自分にとって有利で心地よいことだけを追い求めてしまいます。たとえその行動が罪になると分かっていても、自分が見られており裁かれている存在がいるとは考えもしません。富豪や政治家たちは、自分の行動が誰にも妨げられないと思っていますが、実際にはその行動のすべてを監視し、足から関節、目や体全体にまで存在して罰を与える大きな存在がいることを彼らは知りません。 もし一人の人間が人生を導いているのなら、彼は毎分誰かが自分を見ており、毎日罰していることを忘れてはならない。人間を支配している存在は、人間よりも目に見えない形で多く存在している。

トラクターに乗っていた農夫が目にした光は、小惑星のひとつだった可能性もあります。しかし、雲は惑星よりもはるかに強力な存在であり、他の助けを借りることなくミステリー・サークルを作り出すことができます。上空から撮影された写真

を見ると、雲によって作られたミステリー・サークルは実に多様な形をしていました。その多くは「円形」であり、角のある図形ではないため「サークル」と呼ばれています。中には三日月のような形を3つ組み合わせたものや、3つの円が並ぶ形も見られます。この「3」という数字は「三つの魂（三魂）」を象徴しています。また三日月の形は「知識」を象徴しており、これらのシンボルは「三魂の知識」に関係していると考えられます。雲によって描かれたこれらの図形は、非常に深い意味を持っているものの、特定の一つの意味に限定することはできません。紙に描くことさえできないような複雑な図形が、雲によって小麦畑に描かれていることは驚きであり、科学者たちがその詳細を説明できないこと自体がある種の皮肉でもあります。

もし誰かが「バミューダ・トライアングル」や「ミステリー・サークル」について何も語れないとしたら、それは現代までに発展してきた科学がそれらを説明する力を持っていないことを意味します。先に述べたように、科学には2つの種類があります。ひとつは「世俗の科学（一般科学）」、もうひとつは「神聖な科学（超科学）」です。ミステリー・サークルやバミューダ・トライアングルに関しては、神の力に関係するため、一般科学

ではその詳細を知ることは不可能です。したがって、これらを理解するには「超科学」を基盤とするべきであり、「三魂理論」や「神聖な知識」の理解が求められます。中には「そんな新しい言葉、どこにあるのか」と疑問に思う人もいるかもしれませんが、それに対する答えは、「第六の科学」、すなわち「ブラフマ・ヴィディヤー・シャーストラム（神聖科学）」こそが超科学を内包しているということです。神の秘密で、超科学によって明らかにされないものはありません。現代の人間は一般科学を理解していることで自らを「知識人」だと考えていますが、神聖な問題に関しては、その知性は働いていません。その結果、彼らはバミューダ・トライアングルやミステリー・サークル、空飛ぶ円盤や異星人について理解できないのです。超科学を基礎に据えることで、神に関わる現象や目に見えない力について知ることが可能になります。一般科学にとらわれすぎず、超科学に基づいてこそ、空飛ぶ円盤や異星人に関する問題も理解されるのです。

空飛ぶ円盤とは何か？

空飛ぶ円盤（フライングソーサー）については、さまざまな人々がさまざまな見解を述べています

。ある人々は、自分の住む国の空に空飛ぶ円盤が現れたのを目撃したと語り、中には円盤が降下し、その中から異星人（エイリアン）が降りてくるのを見たという人までいます。しかし、これらの話の信憑性を検証・分析すると、空飛ぶ円盤とエイリアンはまったくの別物であり、両者には直接的な関係はないことが分かります。確かに空飛ぶ円盤もエイリアンも存在していますが、エイリアンが空飛ぶ円盤に乗って移動しているわけではありません。多くの国で目撃された空飛ぶ円盤は、しばしば「エイリアンの乗り物」だと誤解されていますが、それは事実ではありません。実際には、天空には何百万もの小惑星が存在し、それらは物理的な身体を持ちつつも精妙な存在として、神の統治システムの一部を成しています。空飛ぶ円盤もそのような小さな惑星の一種であり、毎日のように現れては去っていきますが、人間の前に姿を現すことは稀で、あえてその存在を示すために目撃されることがあるのです。人間は輪廻転生（生まれ変わり）をしますが、その事実を知っている人はほとんどおらず、しかし時折前世の記憶を持つ人がおり、彼らの証言によって転生が現実であることが確認されたこともあります。このように、天空にはさまざまな種類の惑星が存在し、私たちがまだ知らないものもあります。転生の記憶が人々に突然訪れるのと同様に、空飛ぶ円盤やエイリアンが時折目に見える形で現れるのです。

空飛ぶ円盤は古くから目撃されており、特にアメリカ大陸での出現が多いのが特徴です。おそらく1940年ごろ、アメリカで空飛ぶ円盤に関するある出来事が起きました。過去にも何度も目撃してきたアメリカ人は、これらが何であるのか、どこから来たのか、そしてその中にいるのは誰なのかを知りたいと考えていました。そうした中で、ある日空飛ぶ円盤が現れ、すぐにアメリカ空軍の戦闘機4機が出動し、何としてでもそれを着陸させ、もし不可能であれば撃墜するよう命じられました。しかし戦闘機が接近すると、円盤は青い煙のようなものを発し、忽然と姿を消してしまいました。煙が消える頃には、円盤も完全に消えており、その後の追跡も不可能となりました。「空飛ぶ円盤が墜落した」とする話は虚偽であり、そのような事例は一度も起きていないのです。空飛ぶ円盤は機械でも乗り物でもなく、「小さな生きた惑星」であり、見た目が皿のように見えるために、人間がそれを機械だと誤解してきただけなのです。これらの惑星は毎日地上に降り立ち、人間の「罪の執行」に関わる任務を遂行しています。人間はどれほどの知識を持っていても、どんなに高い地位や豊かな財産を有していても、自らに降りかかる「罪と徳の実行方法」について知る者はいません。罪がどのように人に訪れ、誰を通して、どの

形で執行されているのかを知るには、深い霊的知識が必要なのです。スピリチュアリズムを理解しない者は自分自身すら理解しておらず、そうであれば、自らのカルマ（業）についても知ることはありません。したがって、空飛ぶ円盤が私たちの「罪を統治する者たちの一部」であるという事実に気づくことはできないのです。

エイリアンは存在するのか？

「エイリアンは存在するのか？」という問いに対する答えは、「存在する」です。空飛ぶ円盤が地球上に目撃されるのと同様に、エイリアンも地球上のいくつかの場所で目撃されています。こうした出来事は主に新聞などで報じられてきました。空飛ぶ円盤に関する情報も新聞記事をもとに集められたものであり、限られた情報に過ぎません。より深い真実を明かすには、「超科学（スーパーサイエンス）」の理解が不可欠であり、世界中の科学者や知識人たちがまだ解明できていない事柄にも言及することができます。本章では空飛ぶ円盤の時と同様の手順に従って、エイリアンについて説明していきます。実際のところ、エイリアン、すなわち「他の惑星から来た存在」とされるものは、別の惑星の住人ではありません。「

エイリアン」とは、「この地球上の空間には属さない」と見なされているだけで、実際には人類と同じ地上に存在しているのです。つまり、彼らは「別の家に住んでいる人々」と言い換えることができる存在です。

　　　エイリアンは、神の統治における一つの役割を担っています。彼らはすべての場所に不可視の形で存在しており、自らの存在の証拠を示すために、時折その姿を現します。これは「語られてきたことが真実である」ことの証しとして現れるものです。例えば、ナールゴンダ県に住む一人の若者が、15日前の夜、畑作業のあと家に戻る途中で、街灯の明かりの中、木々の後ろに「頭のような形」を見たといいます。彼は高さ約15フィートの木の枝の隙間からこちらを覗くような影を発見し、勇敢にもそれを携帯電話のビデオで撮影しました。この映像はテレビでも放映され、新聞にも掲載されました。その映像を見ると、腰まで伸びた腕のようなものが木の後ろから出てきていました。ただし、はっきりとした姿は映っておらず、水面に映る影のように曖昧で、物理的な身体というよりも不可視の姿に近いものでした。はっきりと見えたかどうかにかかわらず、エイリアンは確かに存在しています。

エイリアンは、生きとし生ける者たちを統治する役割の一つを担っており、がん細胞を運ぶ役目を持つ「運び手（クーリエ）」として機能しています。彼らは自らの身体の中にがん細胞を蓄え、それを必要とされる場所へと持っていきます。エイリアンの主な任務は、前世で特別な罪を犯した人間に対して、がん細胞をその身体に注入することです。人間の業（カルマ）は、太陽や月を含む12の惑星によって管理されており、それぞれの業は惑星からサブ惑星、幽霊や霊体などに渡され、それぞれが役割を果たして人々にその業を経験させます。エイリアンもまた、太陽・月といった惑星の支配下にある神の王国の一部です。 ある人物ががんを患った場合、それは必ずエイリアンによってがん細胞が注入された結果であると断言できます。なぜなら、世界中のどこを探しても、がん細胞を持つのはエイリアンだけだからです。

人間は、一種類ではなくさまざまな種類の罪を犯します。中には「がんを引き起こす罪とはどのようなものか？」という疑問を抱く人もいるでしょう。それに対する答えは、エイリアンからの意識を通じて得られた情報として次のように説明されています。エイリアンは火星（Kuja惑星）の許可を得て、がん細胞を人々に注入します。た

とえば、ある公務員が、自分の職権を悪用して、無実の人間を意図的に有罪と偽り、その人物を不当に告発し、罪を着せたとします。このような行為によって、その罪は本人が気づかぬうちにKuja惑星によって記録され、次の生では、その罪を償うべくエイリアンががん細胞を注入します。これがその人物にがんが発症する原因となります。つまり、エイリアンはがんをもたらすためだけに存在しているのです。空飛ぶ円盤もまた、生きている惑星の一種であり、人間の業の結果を実現させるために存在しています。

　　警察署の検査官や副検査官のような職業についている人々は、他の公務員よりも無実の人を有罪と偽るような罪を犯す可能性が高いとされています。こうした権力を誤って使用したことで、次の人生でがんという形で罰が与えられるのです。現代においてがんを患っている人々の多くは、前世においてそのような傲慢な権力乱用を行った結果であると考えられます。したがって、今の人生においては、公的権限を不正に使用せず、悪行を積み重ねないようにすべきだと忠告されています。この世界には、見えない形で無数の惑星が存在しており、人々に天罰を下す準備が整っているのです。地震や津波も、五大元素と12の惑星による命令のもとで発生しており、それらは人々に罰

を与える手段とされています。ゆえに、神の知識を学び、罪から逃れる方法を知ることが推奨されています。

なぜ地震や津波は起こるのか？

すべての国には首都が存在するように、「バミューダトライアングル」は、地球空間における神の統治の首都であり、そこには神聖な力が宿っています。この神の統治は、神自身が直接行っているわけではなく、自然が神から委任された力によって支配しています。宇宙の創造以来、生命ある存在の罪と徳は、神の命に従って自然界にある「空」「風」「火」「水」「地」という五大元素によって裁かれています。幽霊、下級霊、惑星、副惑星などの多くの存在も、五大元素である自然の支配下にあり、空飛ぶ円盤やエイリアンもその副惑星の一部に含まれます。自然界は宇宙の創造時から、神の意思に基づく王国を厳格かつ公平に治めており、実際には神が直接支配しているのではなく、神が設計した仕組みとして機能しているのです。人類はこの神の統治の実態を理解しておらず、誰がどの役割を担い、誰が主導権を握っているのかさえも知りません。この点については『悪魔と幽霊─真実の出来事』という著書でも詳述され

ています。神の統治は非常に公平でありながらも、極めて厳格です。

エイリアンのような小さな惑星は、特定の種類の罪を執行する役割を担っているとされており、業（カルマ）の統治が自然界のさまざまな部分によってどのように行われているかを理解する一助となります。ある部分は一種類の罪を処理し、惑星、副惑星、幽霊、下級霊といった存在たちが、それぞれの罪を責任を持って執行しています。人間は、自身の罪に対する意識がなく、年長者が注意してもほとんど考えようとしません。自らの行動を正当化し、罪を軽々しく犯します。小さな罪であっても、あるいは大きな罪であっても、そのすべては身体の中に記録され、巨大な仕組みによっていつか報いがもたらされます。罪は一定の法則で分類され、一部は副惑星によって、一部は惑星、幽霊、下級霊、さらには五大元素によって、人間に体験させられるのです。五大元素のほかにも無数の幽霊と数百万の下級霊が存在し、惑星は12個あるとされますが、その副惑星も膨大な数にのぼります。私たちの背後には、無数の目が見えない形で常に私たちを監視しており、罪を執行する力がすでに待機しています。空飛ぶ円盤やエイリアンを含むさまざまな副惑星が、各種類の罪の執行を担っているのです。

人類は現在、多くの病気という形でさまざまな種類の罪を体験しています。誰かが病気になるとき、そこには何らかの惑星や霊的存在が関わっているのです。人間は目に見えることしか理解しませんが、罪はそれぞれ異なる形で異なる人々に対して執行されています。ときには一人だけが罰を受け、ときには複数人が同時に経験します。たとえば、10人が同じ空間にいて、1人だけが腹痛を起こすというケースもあれば、10人が同じ車に乗っていて事故に遭い、全員が怪我をすることもあります。また、1つの村、地域、州、国全体が同時に罰を受けることもあります。このように、それぞれの状況に応じて、関わる惑星や霊的存在も異なります。

私たちはこの情報すべてを含めて、「なぜ地震や津波は起こるのか？」という題で記録を始めました。2011年3月11日（金）の正午、息子が電話で「テレビをつけてごらん、日本で地震と津波が起きている」と教えてくれました。テレビをつけると、まさに私が書こうとしていたことが現実に映し出されていました。その前日、私は地球儀を使って隣の人物にバミューダトライアングルの位置を示し、「インドネシアから日本の間のどこかで

災害が起こるかもしれない」と話していたのです。そのエリアの地下から発せられたバミューダトライアングルの怒りのエネルギーが、地球の反対側にある日本へと届いたのです。五大元素のいずれかが暴走すると、それが人間を襲います。私たちがそのように語った翌日に実際に日本が被害を受けたことには、大きな驚きがありました。

人々が「バミューダトライアングルの秘密」という書に関心を持ち始めたとき、この三角地帯に関する詳細情報はその書に含まれていると述べられました。地球儀を使って説明すると、アメリカに近い大西洋のバミューダ島付近にあり、特定の地名を示すために「バミューダトライアングル」と呼ばれていることがわかります。一部ではその場所で事故が多発することから「悪魔の三角地帯」とも呼ばれますが、実際にはそこに存在するのは「神聖な力」であり、幽霊ではありません。人間の無知が増すことによって、この神聖な力が苛立ちを感じているのです。過去にインドネシアでも津波が起きましたが、人々は変わることなく、知識を軽んじ、無知のままでいたため、新たな災害が起きる可能性が残されていました。結果として、それは翌日に起きたのです。

今回の日本の被害発生から数時間後、私たちは地震や津波に関する記述を書き始めました。国全体が同時に苦しむ必要があるとき、人々の罪は一箇所にまとめられ、一斉に執行されます。これは小さな惑星や霊ではなく、最も強大な霊的存在の力によるものです。自然界には五大元素があり、ときに「風」と「火」が同時に激しく暴れ、人々に激しい苦痛を与えることがあります。また、「風」と「水」が暴れて地獄のような体験をもたらすこともあります。「水」と「地」が激怒することで地震や津波が発生し、日本の人々が集団で罪の報いを体験するのです。あるいは、「地」だけが怒り、地震が発生して建物が崩壊し、多くの人々が命を落とすこともあります。人間は、自然界のいずれかの要素が暴走しただけで耐えられなくなるのです。日本では4人に1人が知識人であると言われますが、科学的知識も「神の力」の前では無力です。たとえば、母親が泣いている娘を救おうとしても、自然の力の前ではどうすることもできません。一家全員が互いを助ける術もなく、ただ悲鳴を上げながら、自然の怒りに飲まれて死んでいくのです。これらすべての出来事の根本的な原因は、人間の罪に他なりません。

大西洋に存在するバミューダトライアングルの力は、かつてインド洋に存在しており、その力はラ

ーヴァナ・ブラフマという姿で顕現しました。彼は人類に正しい道を示し、精神的な探究心を育み、「知識（グニャーナ）」と「禁欲（ヨーガ）」の模範を示すために生まれました。彼は神聖な知識の象徴として存在していたにもかかわらず、人類は彼を恐ろしく描写し、非難し、悪く語ることで罪を犯したのです。トレーター・ユガからカリ・ユガへと時代が進むにつれ、人類は精神的な教育すら認識できなくなり、修行者たちを嘲笑するようになりました。人間たちは、自らの精神の力が万物に力を与える神の力よりも上だと錯覚し、あらゆる面で神への信仰を失っていったのです。バミューダトライアングルの力は、自然界におけるすべての幽霊、惑星、副惑星、下級霊の中心であり、ついに人類に神の力を示そうと決意しました。テルグ暦の「ヴィクリティ（Vikruti）」年以降、この力は惑星や霊的存在を通じて人類に破壊をもたらすことを決定しました。予告された通り、西暦2010年からは熱、雨、寒さ、風、地震、嵐、津波、火山爆発などあらゆる自然災害が増加するようになりました。これらの災害による人類の破壊を予見し、宇宙の未来を予言したカラグニャーナムの著者ブラフマム師の像が、インド・アーンドラ・プラデーシュ州ダルマヴァラムにおいて一日中涙を流していたのを多くの人が目撃しましたが、その理由を理解する者はいませんでした。

インド洋に存在していたこの力は、数年前からバミューダ島へと移動しました。インド洋に存在していたとき、この力は南インドにおいて神聖な知識を打ち立て、「インド（Indu）」の教えを知るための寺院も建立されました。そのため、南インドには神聖な原理を明らかにする寺院が多数存在しており、これほど多くの寺院が世界中のどこを見ても他にはありません。世界中の人々が神聖な原理を無視している中、唯一インド、特に南インドだけはそれらの原理が今なお生き続けており、再び確立される可能性が残されています。バミューダトライアングルに存在する力が南インドに目を向けていることこそが、その地域に神聖な原理が残っている理由であり、すべての出来事の背景でもあるのです。神に逆らう者たちや、幽霊や惑星に反する者たちは、来世で地獄のような苦しみを味わうことになります。地震や津波は計画に基づいて発生しており、災害の際に神に祈ったとしても、神の支配下にある霊的存在たちはそれを赦しません。神とは、災難のときだけに祈るべき存在ではないのです。地震や津波が起きてから神にすがるのは無意味であり、神はそうした危機の中で無知な人間を助けるのではなく、彼の一部である五大元素を支援するのです。惑星や霊たちは、人間が犯したすべての罪を一つ残らず覚えており、必ずその報いを与えるのです。

1950年以降、人類は一般科学を発展させましたが、それと同時に神聖な知識への意識を失い、無知の中に沈んでいきました。一部の人々は寺院を金儲けの手段とし、宗教的独善に陥って知識人を非難しました。彼らは、私たちが語った知識が理解できなかったとして、私たちを攻撃するようにまでなりました。「インド（Indu）」という言葉が「知識」を意味するにもかかわらず、その言葉の使用を変えさせようとし、脅しさえかけてきたのです。人類はあらゆる面で無知に陥り、神を侮辱しようとしています。神は五大元素という兵士たちを用いて地震や津波を引き起こし、人類を罰しているのです。それにもかかわらず、人類は神聖な知識について研究する努力をせず、現象の仕組みだけを調査し、「どのように」地震や津波が発生するのかだけを語り、「なぜ」起きたのかについては説明できないでいます。

人々が地震発生時に撮影した映像を見ると、いろいろなことを考えさせられます。2011年3月11日に日本で発生した地震の際、あるオフィスで録画されていた映像には、机の上のコンピューターや物が揺れて落ちる様子が記録されています。それらの動きから、建物そのものも前後に大きく揺れていたことが分かります。日本の地震に限らず、他の地震でも同様に物体が前後に揺れる現象が見られました。つまり、大地が左右に揺さぶられて

いるのです。地震学者によると、地震は地中の深部で発生する振動が地表に伝わって地面を揺らすとされています。しかし、なぜ地下で動きが起こるのかと問うと、「地中の空洞が埋まるから」とか「岩の隙間が動くから」という説明しかありません。しかし、この説明通りであるならば、揺れは一方向で起きるはずで、左右に揺れる現象は矛盾しています。地下の動きが地表に届くにつれて、その速度は減衰するはずであり、建物をあれほどまでに激しく揺らすとは考えにくく、それについては、しばらく考えるべきです。研究者たちの言っていることが本当かどうか疑わしくなります。

さらなる疑問として、地球は誕生してから何百万年も経っているにもかかわらず、地震は今なお発生し続けており、将来も発生する可能性があります。その場合、地球内部に空洞がどれほど存在しているのか？ 初めにどれだけの空洞があったのか？ 地球は果たして空洞だらけなのか？ といった疑問が湧きます。これらはすべてもっともな疑問であり、津波に関しても同様の疑問が浮かびます。もし研究者が「すべては入念な調査の結果だ」と言ったとしても、それを盲目的に信じるのは幻想であり、私たちはそれを疑問視し、真相を探る必要があります。2011年3月11日に日本近海で発生

した津波では、時速800km、30フィート（約9メートル）の高さの水が陸地を襲い、東京を壊滅状態にまで追い込みました。このような力とスピードを持つ津波が、海底の地震によって引き起こされたとするならば、それほどの力を持つ動力が海水をどのようにしてあそこまで高く押し上げたのかは不明です。陸地の地震では地面は沈下する傾向がありますが、海では水が上昇します。これは矛盾しており、水が押し上げられるためには、地震の力では説明がつかないのです。このように、津波の水がなぜそこまでのスピードと高さを持ったのかという問題も、未解明のまま残されているのです。

2011年3月11日、日本では海水が時速800キロメートルの速度で30フィートの高さにまで達しました。しかし、科学者や研究者を自称する人々の提示する情報は信頼できるものではありません。彼らは、自分たちの言うことがすべて信じられるべきだという意図のもとに語っていますが、実際には特別な調査を行ったわけではなく、自分たちに都合のよいことを作り話のように語っているだけで、真実を知らないのです。中には、自分たちこそが科学者・研究者だという思い上がった認識のもと、津波や地震、その他の事象について、他人は知らないが自分たちだけが知っているかのように

振る舞い、明らかに嘘であっても人々は盲目的に信じるだろうと高をくくっている者たちもいます。目に見える現象に対して誰も真実を探ろうとしないことを示すために、一つの事例を詳しく説明します。アメリカのWTC（世界貿易センタービル）にアルカイダのテロリストが攻撃した事件は、誰もが知っている出来事です。航空機は100階建てのうち75階付近に衝突し、ビルに火災が発生しました。航空機の燃料が原因で、衝突した階を含む上下2階ずつ、計5～6階が火に包まれた様子がテレビで生中継されていました。その日、アルカイダのテロリストは飛行機を使ってビルにいる人々と搭乗者を殺すつもりだったかもしれませんが、ビルを完全に倒壊させるような大惨事を起こすつもりはなかったと見られます。実際の被害は彼らの想像をはるかに超えており、結果的にアメリカが受けた損失はテロリストたちの想定以上のものであったことに、彼ら自身も驚いたことでしょう。

here

私たちは皆、テレビでWTCのビルが次々と崩れていく様子を目撃しました。一つ目のビルは、まるで『バガヴァタム』に登場するヴァーマナが皇帝バリの頭を踏みしめて地中に沈めたときのように、左右に倒れることなく、まっすぐ地面に沈んでいったのです。この人類にとって未知の出来事をじっくり観察すると、衝突した上層階はそのまま

残り、むしろ地上に近い階層が下に向かってまっすぐ潰れていったことがわかります。このことに疑問を持たない人はいないはずです。二つ目のビルも一つ目と同じように、まっすぐに崩れていきました。確かに、テロリストが攻撃し、二つのビルが倒壊したのは事実です。しかし、それはテロリストが意図した攻撃の規模と、本当に一致していたのでしょうか？　テロによる衝突の衝撃だけであのような倒壊が起きるとは思えず、「鉄が溶けたからビルが倒れた」という説明も、よく考えてみれば成り立たないのです。

アメリカのビルが倒壊した本当の原因は、飛行機の衝突ではありません。テロリストが計画したのはほんの一部であり、それ以外の大部分は、彼らの知らないうちに起こったのです。ビルの倒壊の様子を見て私たちが推測したのは、何か目に見えない力がそこに現れ、そのビルに足をかけて地面に押しつぶしたのではないかということです。もし科学的に「見えない力など存在しない」と誰かが言ったとしても、それはその人が知る科学において存在しないというだけであって、「私たちが知る科学」——すなわち「神聖科学（ディヴァイン・サイエンス）」においては、それらは存在しているのです。この神聖科学が知られていれば、アメリカのビル倒壊だけでなく、日本の地震、インドネシアの津波などについても理解できるでし

ょう。そうすれば、それに関して生じたすべての疑問にも答えが得られます。既知の科学によれば、アメリカのビルを倒壊させたのはある惑星であり、インドネシアの津波、日本の地震を引き起こしたのは一体の幽霊だったとされます。惑星や幽霊の力は誰にも推し量れないのです。地震や津波は、神の王国の首都であるバミューダ・トライアングルの力によって事前に許可されて発生しているのです。2011年3月11日の日本での地震と津波もまた、バミューダ・トライアングルの力の知らぬうちに起きたものではありません。このような事件は地上で多く発生していますが、人類はその背後にある真実を理解できていないのです。雲はわずか数秒でいかなる距離でも移動でき、トライアングルと惑星や幽霊の間の仲介役を果たします。目には見えない活動が多数存在し、想像もつかないほどの秘密が存在しています。これを、世俗の知識しか持たない人々に対して伝えたいのです——私たちが「見えている」と思っている出来事の背後には、実は多くの未知の秘密があるのだと。

第六の科学、すなわち「神聖科学」または「超科学」を理解している者だけが、惑星や幽霊について知ることができます。古代において霊的な教育（スピリチュアル・エデュケーション）を受けた者たちは、惑星や幽霊の存在を理解していました

。このことを証明するために、古代にはラーヴァナ・ブラフマが太陽や月といった惑星に自らの言葉を従わせ、敬意を払わせることを示しました。現代においても、小さな惑星たちはヨーギー（修行者）たちの言葉に敬意を払い、それに従っているのです。しかし、無知が広まった結果、神聖科学の存在を誰も知らなくなり、それによって見えざる惑星や幽霊の手がかりが見逃されてしまいました。そのため、それらがどのように、なぜ津波や地震といった災害を引き起こしているのかを、誰も理解していないのです。こうした人々にとっては、私たちが語る内容は信じ難い話に聞こえるでしょう。たとえ私たちが説明したとしても、神聖な知識（ディヴァイン・ナレッジ）を持っていない者には理解できません。私たちの説明が100%真実であることを理解するには、少なくともある程度の神聖知識が必要なのです。

無神論者は霊的信仰者に変わることができるのか？

　　無知な人々の中には、自分の主張ばかりを繰り返し、他人の意見には耳を貸さない者が常にいます。彼らは「自分だけがすべてを知っている」と思い込み、他者の語ることは科学的でなく、科学的な検証に耐えられないと決めつけ、私たちの言葉にも耳を傾けようとしません。そうした傲慢な者たちが、科学を口実に永遠に無知のままでいないように、現在、アトランティック・オーシャンの三角形の形で存在する不滅の魂の力はその一部をインド（バラト）に転送し、ある一人の人物に誕生させました。その人物には三角形の力が宿っており、無神論者や合理主義者が彼を前にしたとき、その存在がまるで「問いかけ」のように立ちはだかります。その人物の問いに答えることができる無神論者や合理主義者は、必ずや知的な存在へと変わります。反対に、答えることができなければ、その者は科学者ではなく、ただの無知者です。もし本当に科学者であるならば、科学的に答えなければなりません。答えを出せたなら、その人がどれほど無神論者であったとしても、そ

れは知性を持った者であると言えます。科学的知識がなければ、誰であれ答えることはできません。答えられなければ、自らが科学者ではないことを認めざるを得なくなるでしょう。不滅の魂の三角形の力がもたらした謎とは、以下のようなものです。

2010年4月29日付の新聞記事によると、83歳のある人物が過去74年間にわたり一切の食事も水分も摂っておらず、それでも健康を保っているとの報道がありました。彼の脳もまた、25歳の若者のように活発に機能しているとされています。この出来事の真偽を確かめるために、30人からなる医師団が何か月にもわたり彼に対して検査を実施し、すべてが事実であることを明らかにしました。それでも信じられなかった人々が追加で検査を行い、その後さらに多くの人々が彼を調べるようになりました。その時に掲載された記事は、次のページで原文のまま再掲されています。

プララード・ジャニ

70年も何も食べずに...！

プララード・ジャニ氏（マタジ）は、この写真に写っている人物で、医学界にとっての挑戦そのものです。彼は現在83歳でありながら、74年間にわたり食事も水分も摂取せずに生きており、しかも病気ひとつありません。30人から成る専門医のチームが彼に検査を行い、その結果、彼の脳は25歳の若者のように活発に機能していることが明らか

になりました。現在、彼はグジャラート州アーメダバード市のスターリング病院に入院しており、DRDO（国防研究開発機構）の科学者たちがこの謎の解明に乗り出しています。

誰もが知っているとおり、人間が活動したり体の健康を保つためには、食物から得られるカロリーという形のエネルギーが必要です。体温を保つには、肺から取り入れた酸素と、消化器系から得られる炭水化物が、体のあらゆる細胞と分子に届く必要があります。酸素は鼻から吸入され、ブドウ糖（グルコース）は食事によって摂取され、細胞へと運ばれます。それぞれの細胞はまるで工場のように働いており、ブドウ糖が入るには「インスリン」という通行許可証が必要です。酸素は赤血球に付着しており、インスリンの許可なしに細胞に入ることができます。体外から摂取される炭水化物（グルコース）は、燃料のような役割を果たし、酸素と組み合わさって細胞の中で燃焼します。これらの反応が魂（アートマ）の力によって常に起こり、体を温かく保ちます。これが絶え間なく繰り返されることによって、生きた身体の内部は常に熱を持っているのです。この燃焼を続けるには、酸素と食物の両方が常に必要であり、そのために私たちは食べ物を口から、空気を鼻から取

り入れているのです。このように、ここまで説明された内容は「物理科学」（六つの科学のうちの第四科学）に基づいています。

この前提を踏まえると、グジャラート州出身の83歳のプララード・ジャニという人物が、過去74年間にわたって食物も水も一切摂取せずに生きているというのは、物理科学に対する最大の挑戦です。科学の定義では、食物を摂らなければ人は生きられません。仮に「断食を数日しても人は死なない」と反論されるかもしれませんが、それは体内に蓄えられたグリコーゲンがグルコースに変換されて栄養を供給しているからであり、この機能はせいぜい数日間しか持続しません。よって、物理科学によれば、それ以上は生命を維持できないとされており、この前提は科学的事実です。ところが、現実には83歳のジャニ氏が生きているという事実が存在し、この二つは明らかに矛盾しています。科学が偽りであることはありえないはずですが、それにもかかわらずジャニ氏が生きていることもまた事実なのです。科学者たちはその矛盾を前にして頭を悩ませ、いまだに何も解明できていません。

人間がどれほど知的で博識であったとしても、それだけでは「完全な知性」や「完全な知識」とは言えません。真に知性と知識を得ようとするならば、「第六の科学」を知らなければなりません。これを人類に認識させるために、三角形の神力はある人物を創造し、その存在を通じて人類の知性と知識に対する問いかけを与えたのです。三角の力が目指したのは、もしこのような事象が現実に起きれば、人類が第六の科学を認識し、真に知的になるかもしれないということでした。人類は多くの問題を無視してきました。海で数々の不可解な出来事が起こっても、それを理解しようとはせず、プララード・ジャニのような不思議な現象も地上にいくつも存在しています。それにも関わらず、人間は自らを知的だと誇り、実際には何一つ答えることができていないのです。第六の科学を知る者を嘲笑するのは滑稽でしかありません。バミューダ・トライアングルのことさえ語れず、地震がなぜ起こるのか、その歴史すら理解できず、プララード・ジャニがなぜ生きていられるのかも説明できない。もし神の知識がなければ、人間も動物と何ら変わりません。地上に生まれた動物と同じように、人間も食べ、眠り、働くだけの存在になってしまいます。真に知的な人間になりたいのであれば、第六の科学を知る必要があると伝えられているのです。

バミューダ・トライアングルに存在する力は「神聖な力（Divine Power）」と呼ばれています。人間の認識においては、「不滅の魂の力」もまた敬意を込めて神聖な力と呼ばれるべきものです。この「不滅の魂の力（アートマの力）」は、宇宙が創造されたときから、あらゆる場所で機能しています。バミューダ・トライアングルに関して研究を行っている科学者の中には、「あの場所には磁気的な力が存在しているかもしれない。太陽から発せられる熱によって磁力が発生し、そこで数多くの航空機や船舶が事故に遭ったのではないか」と推測する者もいます。しかし、何の証拠も示されないまま、結局「何らかの力が存在している」と述べるだけにとどまっています。多くの人々はそれを「磁力」と呼びますが、人間が生成する磁力と、不滅の魂の力はまったく異なるものです。電気エネルギーは磁気に変換でき、逆も可能ですが、不滅の魂の力はどのような力によっても創造できるものではありません。不滅の魂の力は人間の身体の中にも存在しており、バミューダ・トライアングルの海域にも存在しています。それは宇宙のあらゆる場所にさまざまな形で存在していますが、本質的には同じ力です。存在する場所に応じて、その役割を変えて働いています。海に存在する不滅の魂の力は海にふさわしい役割を果たし、

人間の体に存在するそれは人間にふさわしい役割を果たします。あらゆる生物の中で活動を行っているのはこの不滅の魂の力です。どこかで何かが起こるとすれば、それはすべてこの不滅の魂の力の働きによるものなのです。にもかかわらず、この「アートマ（不滅の魂）」という言葉は広く知られている一方で、その正体や知識を理解している者はほとんどいません。「ジーヴァートマ（個体の魂）」をアートマと呼ぶ人もいれば、「パラマートマ（至高の魂、神）」をアートマと呼ぶ人もいます。しかし、実際のアートマ（不滅の魂）はそのどちらでもないのです。本来、人間にとって最も重要なはずのこのアートマの知識が、本質を理解されぬまま、他の概念と混同されて学ばれているのが現実なのです。

古代において、ラーヴァナ・ブラフマはエーシュワラ・リンガムに聖灰（ヴィブーティ）で三本の線を描きました。これらの三本線について彼は皆に次のように説明しました。下の線は「死すべき魂（モータルソウル）」の象徴、中央の線は「不滅の魂（イモータルソウル）」の象徴、そして上の線は「絶対的魂（アブソリュートソウル）」の象徴であるとし、人間にとって最も重要なのは中央の線に象徴される不滅の魂の知識であることを

示すため、その中央の線に紅色の粉（クムクム）で宗派の印を付け、皆に示しました。同じように、彼は自らもその印を身に付け、他人にもそれを身に付けさせました。それにもかかわらず、今日の霊的実践者たちは不滅の魂についての詳細を知らず、それがどのようなものであり、どのような働きをするのかを確信を持って語ることができません。不滅の魂について理解できれば、数多くの秘密が明らかになるはずです。さて、本題に入りましょう。現在83歳のプララード・ジャニという人物の体には、特定の機能を担う26の要素があり、そのうちのひとつが不滅の魂です。不滅の魂を除いた場合でも、25の要素（モータルソウルを含む）が働いて初めて身体は生存可能です。そして、それぞれの要素に機能を与える力を授けているのが不滅の魂なのです。不滅の魂が存在しない場合、身体はまったく動きません。不滅の魂は身体全体の支配者であり、大西洋に三角形の形で住まいを構えていると同様に、身体では頭部に存在し、そこから全身に力を送っているのです。

この三角の力は、無神論者や理性主義者、無知な人々、科学者たちに対する模範として、74年間、食べ物も水も口にしていないプララード・ジャニという人物を地上に創り出しました 。彼は9歳の頃から一切の食物や水分、固形物・液体の摂取を

断ち、以後今日に至るまで健康な状態で生き続けています。彼がどのようにして健康を保ちながら食物なしで生きているのかという問題は物理科学の領域に関わるものですが、物理学者たちにはそれを説明することができません。その理由は、この現象が「不滅の魂」に関連しているからです。物理科学は不滅の魂を理解しておらず、それを説明できるのは神聖科学（第六の科学）のみです。この第六の科学を知っている者だけが、プララード・ジャニがどのようにして食事なしで生きているかについて答えることができます。世界で一般に知られている四つの科学しか知らない者ではなく、第六の科学を知る「不滅の魂の知性体」に尋ねたところ、彼らは「身体のすべての機能は不滅の魂によって操作されている」と答えました。不滅の魂は身体の支配者であり、その力は全身に拡張され、あらゆる分子の中に存在しています。身体には何百万という要素が存在し、それぞれにこの力が広がっています。前に述べたように、不滅の魂は各要素の中で酸素とグルコースを混ぜて燃焼させているのです。これはすべての人の体で起こっていることですが、プララード・ジャニの体で起きている現象は、この不滅の魂の三角の力によって特別に創られたものであり、次のような働きをしています。

プララード・ジャニは鼻から空気（酸素）を吸っていますが、口からの食物は一切摂取していません。酸素には燃焼の性質があるため、肺から血液中の赤血球に入り、それが血流によって各要素に届きます。通常なら酸素に加えて燃焼するためのグルコースが必要ですが、彼は食物を摂っていないためグルコースは到達しません。しかし、各要素の中に存在するアブソリュートソウル（絶対的魂）の力が酸素とグルコースを結びつけ燃焼させており、不滅の魂が身体の主であり、運命に従って動作しているのです。他に不滅の魂を制御する力は存在せず、身体のすべての動きは不滅の魂によって制御されています。不滅の魂が身体を冷やさず、生命を維持したいと望むなら、たとえ酸素とグルコースが少量しか届かなくても、うまく燃焼を促進させ、健康を保つのです。プララード・ジャニの身体では、酸素は各要素に届いているが、グルコースは届いていないにもかかわらず、不滅の魂は酸素だけを燃焼させ、身体を冷やすことなく生き続けさせているのです。通常、グルコースが燃焼すれば老廃物として灰が生成され、それが体外にうまく排出されなければ病気を引き起こす可能性があります。しかし、彼の体内ではグルコースの燃焼が起きていないため老廃物も発生せず、非常に健康的であることが証明されています。これは、「不滅の魂が協力すれば、人は食物な

しでも生きられる」ことを83歳のプララード・ジャニを通して実証したものです。不滅の魂はあなたの身体の中にもすべての力をもって存在しています。彼の身体では、不滅の魂が特別に作用し、グルコースなしで酸素のみを燃焼させたのです。この現象についてはプララード・ジャニ自身も物理的には理解していません。つまり、彼自身が何かを達成したというわけではなく、単に不滅の魂が彼の身体の中で特別に働いた結果、彼は知らず知らずのうちに特別な存在として認識されているのです。

繰り返しになりますが、不滅の魂（イモータルソウル）こそが、誰の身体においても唯一の支配者であり、足の不自由な者を歩かせ、口のきけない者を話させ、死んだ者を生き返らせることさえできます。必要があれば、生きている者を死なせることもできますし、皆が「死んだ」と思っていた者を驚くべき方法で生き返らせることも可能です。不滅の魂はすべての力を備えて身体の中に存在し、あらゆる種類の機能を実行することができます。しかし、そのような不滅の魂を誰も識別しておらず、体内に不滅の魂が存在しているということさえ気づかれていません。バガヴァン（神）は『バガヴァッド・ギーター』の中でこの不滅の魂

について詳細に語っています。「プルショーッタマ・プラープティ・ヨーガム」では、死すべき魂（モータルソウル）、不滅の魂（イモータルソウル）、絶対的魂（アブソリュートソウル）という三つの魂が存在し、それらはそれぞれ「クシャルドゥ」「アクシャルドゥ」「プルショーッタマドゥ」という三人の男性（ムッグル・プルシュル）として体内に宿っていると説明されており、私たちはこの三魂の理論を「トライタ理論」と呼んで説明しています。ところが、インドゥ教社会の宗教的形式主義者たちは不滅の魂についての知識を持たず、私たちの説をキリスト教的なものだと非難し、「キリスト教の教えを説いている」と言い出しました。これにより、かつて神聖な知識の栄光を誇っていたインドゥ宗教が、今や自分たちの宗教がどれで、他宗教がどれかすらも識別できない状態になっていることが明らかです。

here

現在の人類は、不滅の魂についてまったく知らない状態にあります。誰かが4つのマジックを見せればババ（宗教的指導者）になり、3つの歌を歌って数語語ればスワミジ（導師）になり、1つの詩を唱えれば学者と呼ばれるような時代です。しかし、ババやスワミジ、そしてそう呼ばれる学者たちも、不滅の魂については何も知らないのです

。不滅の魂はこのような無知の状況に苛立ち、人々に知識を広めるために、時には罰を与える形ででも教えようと決意しました。ゆえに、不滅の魂はバミューダ・トライアングルを住まいとし、そこに入った多数の航空機や船を姿を消させ、雲の力を使って他の惑星へと送りました。そこへ行った人々は地球のことを忘れ、その世界に没頭し、知識を学ばせられたのです。彼らがそのようにして知識を得ると、再び地球に生まれ変わり、知識への関心を持った知性者として生きるようになります。このようにして、不滅の魂は「地上に完全な無知が広がらないように、少なくともいくらかの知識は残るように」と考えました。知識に無関心な者へ知識を与えるために、不滅の魂は多くの人々をバミューダ・トライアングルで失踪させました。不滅の魂の力を軽んじ、またその力を持つヨーギーや知性者を侮辱する者を罰するため、自然の五大要素を使って数々の天災を引き起こしているのです。人間たちはそれをただ苦しんで体験しているだけで、「これらの災害の背後には誰がいるのか」を考えようともしません。不滅の魂はさまざまな手段で人間の目を開かせ、知識の道へ導こうとしており、その一環としてプララード・ジャニのような人物を創造し、知識を持つ者すらも驚かせ、注意を引かせました。それでもなお、不滅の魂が行っている活動の詳細は見落とされ、

「それをしても意味がない」と軽視されてきました。そこで不滅の魂は、私たちのような人間を用いて、自らの働きと役割を詳しく説明しようとしているのです。私たちの内なる不滅の魂がこの知識を語っているとき、それを聞こうとしない者には、望むままに罰を与えるのです。不滅の魂による罰を受けるよりも、不滅の魂についての知識を学ぶほうがよいのです。ですから、私が言いたいのは——あなたがどんな地位にいようと、どれほどの権力を持っていようと、金持ちであろうと学者であろうと普通の人であろうと——あなたは不滅の魂の手の中にあるただの操り人形にすぎません。だから、せめて今からでも、不滅の魂（アートマ）についての知識を学び始めてください。

一つの事実を支持するにも科学がどれだけ必要か、それを否定するにも同じだけの科学が必要です。

千人が「偽りだ」と言っても、それが真実であるなら真実であり続けます。

千人が真実を否定しても、それは偽りにはなりません。

三角形の秘密
(バミューダ・トライアングル)

三宗教における唯一の預言者

スリ・スリ・スリ・アーチャリヤ・プラボーダーナンダ_・ヨギーシュワルル